
お日様お届け屋さん

pickme

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お日様お届け屋さん

【Nコード】

N3055K

【作者名】

pickme

【あらすじ】

事務所を立ち上げて間もなくの仕事に頑張る女性と大学生で目つきが悪い男の子との、ハートフル（ラブ？）ストーリー！
女の子が頑張っているお話です！

春と雷と20人目の訪問者

その1 春と雷と20人目の訪問者

春、である。

うつらかな陽射し、そよぐ風はやわらかで柔らかな花の香りを運ぶ。画用紙にたっぷり水を含んだ絵の具の青を落としたように滲んだ優しい青空。ガーゼのようにうすい雲が、ふんわりと漂って。気の早いタンポポの綿毛がふわふわと宙を舞う。

その完璧にのどかな背景とは裏腹に、牧野容子まきのようこは不機嫌だった。

それはもう、どんより薄墨色のくもり空に雷鳴の兆しらしき紫の光りを放電しようかっつくらい、見事な不機嫌。

みしみしって手の中でシャーペンが悲鳴を上げている。

だめ
「却下」

「えー」

ぼそりと呟いた言葉に、前の女が不満そうに唇を突き出した。がたがたって身じろぎする動きに合わせてパイプ椅子が音を立てた。ぐりぐりとしたマスカラ過剰のまつげが重そうに上下する。

口紅からアイシャドウまでのバッチリメイク。華奢なミュールにオフホワイトのミニ丈襷スカート。ピンクのキャミソール。きんきらきに塗りたいくった長いど派手なネイル。大きく巻いた髪は、フランス人形並みにタテロール。

来る場所間違えてんじゃないの？

その一言を何とか飲みこんで、ばん、と組みたて式の長テーブルを叩く。手もとの履歴書をつき返す。

「とにかくダメ、却下！」

ぶうつと女は膨れると、立ち上がってそれをひったくる。

「ちえっ おばさんが偉そうに！」

「な・・・」

脳が瞬間沸騰して真っ白になる。あまりの言いようにとっさに言葉が出ない。

捨て台詞の後、ばんって扉が乱暴に閉まった。

その途端、一気に脳の機能が復活。再起動。

「何だとお！この性格ブス！ギャル女あ！」

立ちあがった拍子にがたりとパイプ椅子が鳴った。反動で軽い長テールまでが移動する。

「なんて奴ーっ 馬鹿はあんたの方よ、非常識のど勘違い女ーっ」
怒鳴り返せど相手はすでに外、で。

あー腹が立つっ！

この怒りをどこにぶつけてやろう。怒りにぐつぐつ頭を沸かせながら、とにかく椅子に座り直した。まさか追いかけていつて殴り飛ばすわけにはいかない。いくら失礼だからといっても、相手は稼いでいないガキで、こっちはいいオトナ。

冷静になれ、容子！

「十九人目えー・・・よーこ、もう諦めたら？」

ぼへぼへと、今にも溶けそうな声が隣りから上がる。事実、腕を長テールに伸ばしてその人物頭を伏せている格好。肩を越すふわふわの髪が顔を覆っているので、寝ているのか起きているのかすら定かではない。

一つ、大きくため息。

間違はなく、脳みそ溶けている。

「真紀さん、せめて顔を上げていてよ。あんたがそんなんだから、

相手にもなめられるじゃない。たかだか勘違い大学生のガキに！」

「だってさ、よーこ。あんた面接相手、入って来た時点でダメだししているじゃん。あの子合わせて19人」

来た人数全員って事だ。つまりは

それにしても、よく数えているな。寝ているとばかり思っていたのに。

こっちに頭を反転させて、唇だけはどうにか確認できる真紀さんに、目を眇める。

「だって、あんなお馬鹿っぽい、もとい全くなにも考えていなさそうな連中だったじゃない！一人目はぎんぎらぎんのロッカーで、二人目は勘違いしている主婦で、三人目はやっぱり変なオヤジで、四人目はがりがりの骸骨君だったし、五人目は来る早々ここに車ぶつけて、六人目は・・・」

「ま、その中でもちゃんと仕事分かっていたのはほんの数人みただけだねー。工事現場風のおっちゃんなんて、完璧お弁当屋さん間違えていたよ」

えんえん続きそうな先を遮って、のんびりペースで真紀さんはあははと笑う。

この状況で笑えるのか？

唇の端が引きつるのが分かった。

ごろごろって雷鳴が聞こえる。

いくら雑誌で募集しているからってバイト代もあんまり出せないし不定期だから、まあまあのおんきに構えていよう、何て思っていた今日の朝が恨めしい。そりゃ、あんまり来ないだろうとは思っていた。それが、結構人が来るのはいい。それは確かにうれしいことではあったけど。明らかに冷やかしかとか、勘違い野郎が大半を占め、その一人一人にお帰りいただくだけで疲れる。しかも、その勘違い野郎のほとんどが・・・

「やっぱりさ、“お日様お届け屋”なんてネーミングが、お弁当屋さんっぽいんじゃない？配達してくれて来たもんねー。最近この辺工事多いのかな。あとOLさんに以外に主婦の人」

ドーン！て一撃が落ちた。

あまりの能天気な発言に、今度はこめかみが引きつる。

「真紀さん、あなた状況分かってる？この調子だったら、100人来ようと1000人来ようとこの調子で1日日が暮れるんだよ？」

メンセツになっていない面接で。人を雇うどころじゃない。

仕事を頼むどころじゃない。

これは切実な問題なのだ。

「冗談じゃない！ここの事務所だつて、立地がまあまあだったから借りるお金結構いつているんだから」

今はまだがらがらのスペースを指す。後ろに同様のパイプ椅子が並べられ、長テーブルが折り畳んで積んである。20畳くらいの広々とした部屋なので、こう何もないと余計に寂しく感じる。三方は連なる様に窓が儲けられており、一方だけが壁。薄いそれを隔てて隣りにも部屋があり、そこは完璧に物置と化している。二階建ての下は駐車スペースに空いている。だから、見晴らしはいい。とても前は菜の花畑になっているし。住宅街の外れで、町の中心地にもそう離れていない。

「どーせここ、工事現場跡のプレハブでしょ」

むくり、とようやく真紀さんが顔を起こした。顔を覆っているワカメのごとき髪を手でどけ、パツチリとした目を据わらせて見返してくる。

「元手幾らもかかっていないし。こういうの借りさせたら容子は上手いから。ただ同然で借りているんでしょ。設備だって放置されていた椅子とかで間に合いそうだし。ホント得だよなー」

真紀さん？

何となく気迫がある真紀さんに、やや弱気に主張する。

「経費節減は当然でしょう」

「そーだよー。店名も場所も何もかも容子が決めて来ちゃって、私はここに座っているだけ？そーんな薄情なこと考えないわよね？共同経営者でしょ、うちら」

据わった目で真紀さんは、にっこり微笑む。

黙って微笑んでいれば天使の笑顔。なのに、目つきが座っただけでどーしてここまでえげつない笑みになるのか。

顔が引きつるのがわかる。

嫌な前兆。予感がする。

ふふふつと口元だけ天使の微笑みを浮かべ、そのエセ天使はやっぱりとんでもないことを言い出した。

「私もいい加減ここに座っているの飽きた。だから、次に来た子を採用しよう」

「真紀さん？！」

正気？！！！！！

ピシャーンっ

特大の一撃が天地を揺るがした。今のは完璧地面を抉った。

立ち上がった途端、がたんと派手な音がして椅子がひっくり返る。

「丁度いいじゃない。20人目で切りがいいし」

何が丁度いいのか、何が切りがいいのかさっぱり分からないんですけども。

そんなお手軽なことなのか？人を雇うって！

なお悪いことに、言い出したらきかないのだ。真紀さんは青くなって口を開いた。

「ちよつと冗談は・・・」

「あの」

投げかけられた言葉に、ぴたりと動きが止まる。戸口の方から、人影。

げ．．

オーマイゴッド。早速来ちゃったよー。

無愛想なバイト生

その2 無愛想なバイト生

「面接ってまだやっているんですか」

無愛想な声に、真紀さんがにこやかに手を上げた。その胸倉を掴みそうになった手を払いのけ、しっかり片手で襟元ガードしながら。

「どーぞどーぞ！まだやっていますよ」

真紀さんは今にも踊りだしそうなるん声で相手呼び入れる。
何て間の悪いタイミング。

胸倉を掴むはずだった手を握り締める。

絶望的な思いでのろのろとひっくり返ったパイプ椅子、起こして座る。

恐くて前が見られない・・・

また妙なオカマだったらどうしよう。勘違いだったらどうするの？根暗そうな奴とか、リストラされた借金にあえいでいるお父さんとかだったら！

それでも合格にするといいからにはするだろう。真紀さんは良かれ悪しかれ公平な人だ。大雑把で考え無しとも言えるけど。

そりゃ、普通の人でいいのよ。別に引越屋さんじゃないんだから、体丈夫な人じゃなくても筋肉がなくてもどうにかなる。なさすぎの

骸骨じゃ無理だけど。出来れば年取っているより若い方がいい。美観の問題じゃなくて（それもあるけど）仕事の内容からしてだから、それは考慮にいれなくちゃいけない。でも募集内容には年齢制限はしたけど、資格は車の免許持っていればOK。つまりある程度の若さがあれば誰でもOKってこと。

そりゃ前歴は問わないけど（もちろん犯罪者はお断りの方向で！）、リストラのお父さん組みは止めて欲しい。特に、首吊りそうで、車があつたら乗ったまんま崖に突っ込みそうな人は。絶好な自殺場所があるからして。

でも、うちはフルタイム労働じゃないし。せいぜい週二日のアルバイト。だから、大学生あたりが釣れると思っただけだな。それで来たのがあの勘違い女じゃ、ため息出る。ま、あの時給じゃ、こんなもんなのかなー。

「あ、じゃあ、週二日は大丈夫ね？そっかー。んじゃー問題無しじゃない」

そんな台詞がようやく耳に届いた時には、すでに終盤に差し掛かったところらしかった。真紀さんが勝手に話を進めている。

語尾にハートマークが浮かんできそうな声で、手元の履歴書をひよいと、こちらに渡してきた。

「よーこ。この子でいいじゃない。条件皆クリアだよー」

にこにこ能天気そうな顔。

ため息をかみ殺して白い履歴書に目を落とした。

本郷篤

名前の三文字がくつきりはつきり書かれてある。
ほんごうあつし。19歳で現在大学二年生。免許は18になって
すぐ取得している。

あれ？ホントにまとも、だ。

顔を上げて、ようやく面接者の顔を見る。

その途端、こちらを見ている目と合った。ばちんと音がするくら
いの勢いで。

仰け反りそうになるのを抑える。

う・・・目つきが悪い。

黒い髪はいかにも適当な長さに切ってかまっていない感じ。白っ
ぽいトレーナーにジーンズ。どっかりとパイプ椅子に腰を下ろして
長い足を組んでいる。けど、上体を斜めに反らせているので、やけ
にえらそう。それに、カチンと来る。

何えらそうな態度しているのよ！

びびってはられない。相手は年下だ。きつとして相手を睨みつ
けた。

「運転免許取って一年目みたいだけど、どれくらい乗っているの
？」

「一年っす」

無愛想に青年は答える。

簡潔極まりない。

もつと言うことはないのかーっ

「その一年にどれくらい乗っていたかってことをききたいの！この仕事はある程度運転に慣れていないと出来ないのよ！」

「ちょっと容子。そんな目くじら立てなくてもいいじゃない、ね」
宥めるように真紀さんが両手で腕を引きとめ、前の男に笑い掛ける。

「別に。毎日だけど。免許取ってからすぐ車買ったし」

本郷青年はずり落ちそうな体を、元に戻して座りなおした。

あーそう！親に買ってもらったんかいっ 生活費は仕送り出し。
坊ちゃんの道楽かよ、このバイトもお！

ムカツク、とことんムカツク！最近の学生って奴は！

「んじゃ、採用！文句無し！」

却下と怒鳴る先を制して、真紀さんがにこやかに告げる。

抗議の声を上げようとして、腕を掴まれた。ぎりぎりと力を込めて握られて、悲鳴をなんとか飲み込んだ。

真紀さん、爪伸ばしすぎー。わざとじゃないでしょうね？つめ立っているの。

「一人暮らしだったよね。こっちから仕事については連絡するから、曜日はさっき話したとおりでOKだし。前日にはちゃんと連絡するからね」

てきばきと真紀さんが勝手に話をつける。

軽く会釈するようにして彼は立ちあがった。

げ、でかい。

立ちあがったその高さにギョツとする。どうりで椅子が小さく見えただけだ。

そのまますたと戸口に向かい、失礼しますって断って、扉が閉まる。

「身長185センチ。バスケやってて重い荷物もOK。おまけに大学二年生になりたてで、長く続けてもらえそうだよ。完璧じゃん！」

履歴書を確認しながら相変わらざるんと鼻歌を歌い出しそんな真紀さん。

完璧ってあなた。

ずずずと抱えた頭がスライドして、テーブルに突っ伏す。

一瞬だけひんやりして、すぐに人肌に暖められる。生暖かくて気持ち悪い。けど、もう疲れて頭があげられなかった。

「そんなあつさり決めちゃってえ。変な奴だったらどうするの。何かぬぼーって感じだったじゃない」

「大丈夫！あの子いい子だよ」

しくしくしく。

その根拠は？どうせアテにならないんだから。あの目つきのごくがそう見えるって？

脱力して、泣きたくなる。

初めて人を雇うという華麗なる第一歩。もう少し、気の良さそうな青年に、引きつけて欲しかったな。

あーあ・・・

ようやく長い1日が終わる。見上げた空は、優しい夕暮れ色に染まっていた。

おひさまポッポ

その3 おひさまポッポ

「そっち、もつとしっかり押さえて」

「だって息が出来な・・・降りかかって来るんだもん！」

「そっち風下でしょー。風上に回ったらいいって！」

「待つて待つて」

ばたばたばた。

反対側に行くと、真紀さんはブルーシートをしゃがんで押さえた。

「OK」

「じゃ、行くよー？」

シューツとスプレーを壁に向けて噴射する。卵色の液体がぱつと散って、壁に色をつけていく。スプレー式のペンキ。でも面積が広すぎて、うまく塗れない。

「うん、いいよ。真紀さん、終わった端から刷毛で塗っていつてやっぱりこれじゃ、上手くぬれないや」

「スプレーの方が簡単そうなのになー」

真紀さんが、同じ色のペンキの缶を取ってくる。今度は刷毛を使って上から下に塗っていく。

しばらくそのスプレーを懸命に動かしていたものの、その塗り方じゃほとんど均一に塗れないから意味がないことに気付き、同じように刷毛を取った。

一、二、一、二・・・

ぎりぎりまで手を伸ばして、一番下までを一気に塗る。これを繰り返す気分は、まるで中高生の部活動のスクワッド。足腰の鍛錬には最適かもしれない。

でもうちはペンキ塗り屋ではない。念の為。

心情的には日曜大工だ。いや、今日はれっきとしたウィークデイだけ。

「ねー、これって、もしかなくてもものすごく大変？」

先に上下運動を繰り返していた真紀さんがグルッと部屋を見まわして情けない声を上げた。部屋の広さは20畳分。先は長い。

「当たり前じゃない。大体、もっと明るい色の事務所にしようって言ったのは真紀さんだよ？」

「そりゃ言っただけさ」

ぶつぶつとぼやきながら、真紀さんはしぶしぶ作業を再開する。外の風が結構強かったりしたので、窓は少ししか開けていないため、すぐにむれむれの蒸し風呂状態になる。おまけにシンナーの匂いが充満していて、マスクをしていても息苦しい。

「ね、岩ちゃん呼ぼう。最近暇だからって前言っていたし」

すぐにギブアップして、真紀さんが携帯を取り出す。

「いーけど、岩ちゃんだって仕事あるでしょー」

落ちてくる汗をぬぐいつつ、刷毛を走らせる。

「大丈夫だよ。自営業だし」

だから大丈夫じゃないってば・・・
横目で見ると、真紀さんはもう喋り出している。

「あー岩ちゃん！元気？うんうん、私も元気！所でさー今暇じゃない？暇じゃないよねー、そりゃー。そー前話していたやつ、事務所の改装やっているんだけど。そーなんだ。手が足りなくて。えーホント？いいの？わーい、ありがとー。んじゃ待っているね」

ニコニコと真紀さんは顔を上げた。

「あのねー岩ちゃん来るって」

「・・・」

それは、今の会話聞いているだけで良く分かったけれども。

「岩ちゃん、最近お家継いだばかりで大変だから、仕事の邪魔はしないようにしようねって言わなかったっけか？」

「えーーっつと。そーだったっけ？」

目が徐々にずれていってあさつての方を向いた。

忘れていたなー！完璧に！

「あつそーだ！じゃ、彼も呼ぼう。篤君！」

「おい！ちよつと真紀さん！？」

何がじゃーなんだ何が？

止めるまもなく真紀さんは携帯に向かって話し出している。

「あー、篤君？どーも、お日様お届け屋の内倉真紀と言いますが、こんにちはー。ところで今暇あるかなー？突然で悪いんだけど、今からこれない？え、良いの、ホント？ありがとー。うんうんOKだよー。それじゃ、事務所で待っているねー」

「真ー紀ーさん！彼は友達じゃないの！バイト生なの！」

待っているねーじゃない！

時給換算で働いてもらう人なのよ？

が、振り返った真紀さんは、何にも考えていない顔でのたまった。

「んじゃ、時給で払えばOK！じゃない」

「OKじゃない！これはそもそも予算超えてやっていることなんだよ？これ以上バイトに来てもらって労働の対価を払うっての！？」

腰の手を当てていったら、べったりと手にペンキがつく。

うわーっ

あわてて刷毛をカンに突っ込んだ。

対して真紀さんは、腕組をして二王立ち。

白いキャンパス地のエプロンにはすでに卵色が幾つか散っている。頭には三角巾にマスクをしている。まるでお掃除のおばちゃん、って感じだ。

「あのね。わたし達じゃ、上まで手え届かないでしょ？だから、

人手はどっちにいてもいるの。ということで、篤君のお友達も暇なら連れてきてって言っているから」

「真紀さん?!」

あなたはまた・・・いつの間にそんなこと。

がくーっと肩が落ちる。

ぱっぱーと、良く響くクラクションが外から。

駆け出して窓辺により、真紀さんは勢い良く窓を開けてヤッホーと手を振った。

「うわーなんだコリヤ。二人で塗っていたわけか?」

岩ちゃんこと岩村健二君が、のっそりと上に姿を現し、中の部屋を一目見て一言。ちやちな戸口がますます小さく見えるくらい、岩ちゃんはタテにもヨコにも存在感のある人だったりする。がっしりとした筋肉に180センチの身長があるから、ちよつと見は元プロレスラーかって思ってしまうんだけど、真一文の太い眉の下にある目がとても優しい。実はとても面倒見の良い兄貴分だ。

「そー。でも、何だか終わりそうにないからさ、ちよつと手伝ってもらおうかと思って」

「そりゃー終わらんよ。これじゃ」

腕組する岩ちゃんに、

「ごめんね、仕事中に」

「いってことよ。しばらく会っていなかったし、事務所開く話しは聞いていたのに手伝いなんも出来なかったしな」

がしがしと大きな手で頭を撫でられる。

うーん、久々の懐かしいなでなでも。こっちも二十歳をとうに越しているんだけど、岩ちゃんにこれをされるのは未だに弱い。

岩ちゃん良い奴ー。

つい兄貴！と懐きたくなってしまう。

「とにかく、上から塗らないとなあ。それに刷毛、こんな小さいのじゃなくてもっと大きいのあるだろう。終わらねーぞ、これじゃ」

「はいはい！んじゃ、私買ってくるよ」

飽きてきていたんだろう。真紀さんは勇んでエプロンとマスクを放り出した。そのままパタパタと戸口に向かう真紀さんに、一言言っ
てやる。

「真紀さん、アタマ。取ってないよ」

あらら、といいながら真紀さんは三角巾を取りつつ戸口から外へと消えた。

「相変わらずだなー真紀も。上手くいっているのか？二人とも」

「……想像通りだと思うけど」

岩ちゃんは、早速真紀さんが使っていた刷毛で天上近くから塗っ

ていく。さすがの長身で、頭の上ではははと笑った。

「そーか。でもま、なんとか動き出しているようじゃないか」

「まあね。バイトも雇うことにしたし」

「人を雇うのか？そんな余裕、あるんか」

びつくりしたような黒い目に、ちょっと苦笑した。

「うーん。やっぱり男手がいると思ってね。といっても週のうち数日だけ。定期便を任せようかなって。余裕はほとんどないけど、時給もものすごく安い。それでも来てくれるって人に、文句は言えないんだけどさ」

「そうか。良い奴だったら良いけどなー」

「ああ、今日来るよ。さっき真紀さんが呼んだの」

「ま、人手がいた方がいいが。1日で終わるか？」

「無理かな」

ちよつとさすがにうんざりとして残りの距離を見た。千里の道も一歩から。ちよつとホントに遠い。

そのうちに、どっかどっかと戸口で足音がしてきた。

「こんにちはー」

見たこともない男が現れた。後ろから本郷篤が顔をのぞかせる。

そのさらに後ろから、真紀さんがにこにこやってきていた。ビニールの買い物袋はちゃっかりと本郷が手に持っている。

「容子、岩ちゃん。ちょうどそこで彼らと行き会ってね。こっちの彼が早川俊之君、こっちが本郷篤君。早川君は篤君の友達なんだって。で、そーいや篤君にも私ら自己紹介していなかったよねー。私は内倉真紀。真紀ちゃんて呼んでねー。それで岩ちゃんに容子」

なんなの、その省略し過ぎの紹介はー！

「俺は岩村健二」

「牧野容子、よ」

「へえ、ここが事務所なんですかー。随分広いですね」

感心したように早川が見まわす。

そりゃー何も入っていないもん。がらがらだから余計に広く見える。

「はいはい。んじゃ、これ刷毛もってね。一番おっきいの買ってきたよ。一気に今日塗っちゃいましょう」

号令だけは勇ましく、真紀さんが刷毛を持った手を上げた。

出陣の日

その4 出陣の日

“お日様お届け屋さん”は宅配サービスだ。

顧客は山間の小さな村。

定期便が週に2回、注文の品を直接自宅に届ける。その村と言うのが、近くに30軒くらいしかない本当に小さなところで、スーパーはもちろんコンビニにも病院もない。

学校も廃校になっているので、子どもがいるくらいの夫婦は町に出て暮らさなければならぬという極め付きに田舎で不便な所だ。もちろん、電車もバスも通っていない。

やっぱり利用者が少な過ぎて撤退してしまったとのこと。

そんな不便な所に生活しているのは、平均年齢が65歳というお年寄りばかり。もちろん免許もろくに持っていない。移動手段を持たない1軒1軒に注文の品を届けるのが仕事。その内容は大抵生活必需品で、魚や肉、ミルクなどが多い。野菜や米などはもう自給自足しているから必要ないのだが、果物やお菓子やと欲しいものは結構あるらしい。大抵リストにあるものを全部揃えていたら、大きめのワゴンが一杯になるのだから。

白白と夜が明ける。

容子はそれを横目に見ながらあくびをかみ殺した。

たまに肉体労働なんてするもんじゃない。お陰で今日は起きるのがいつも以上に辛かった。朝は苦手だった。隙あらば布団に潜りこみたいと脳が葛藤する。その未練がましい感情を理性が何とか意識をベットから引き剥がして勝利を収めるんだけど、その代わりに感情面の脳がストライキを起こしてぼんやりとしていてしばらく頭が働かない。そう言い訳すると、大抵真紀さんはけたけた笑うんだだけ。

うー・・・くっそー・・・。

必死で腕に爪を立てる。

体がドロのように重い。眠った気がしない。夢の残像が見えるよ・。

こっちが必死になって体面を保とうと立って待っていると言うのに、真紀さんとはとっととワゴンの助手席に収まってすやすや寝ている。

珍しく自分も行くと言ったらあつという間にこの有様だ。

あんたと言う奴はーあつ

本当に行くだけ。丸つきり手伝う気はないな？

珍しく時間通りに来たと思ったら、初めっからこれを狙っていたのだろ。そうなると、ワゴンの後部座席しかない。一杯まで荷が積めるようにと後ろの座席を外し、ほとんど剥き出しの状態になった後部座席はつきり言ってエンジンの爆音は凄いわ、振動も凄いわ、匂いも頂けないわとある意味最高な座り心地なのだ。

「おはようございます」

無愛想な声がかかり、眉間を押しながら目を上げた。

本郷篤だ。

こいつは本当に表情が変わらない。いつも怒っているように見えるし、不機嫌そうにも見える。しかし、昨日の労働の疲れは微塵も感じられなかった。

さすがは運動部ってところか。

「おはよう。時間ぴったりね」

朝の6時。意地悪な意味も込めて、この時間を指定した。

今時の学生が、この時間に起きて来られるかと思ったけれど、昨日は特に文句も言わずに承知し、そして時間通り来た。

まずは合格。

組んでいた手を下ろして、ワゴンを指す。

「それじゃ、免許持ってきている？まず、市場からね」

キイを渡すと、それを受けとって本郷篤は運転席に乗り込む。容

子も後部座席に納まった。何も言わずに操作を見守る。

マニュアル車なんだけれど、特に戸惑いもせずにエンジンをかけて車は比較的スムーズにスタートした。手馴れた動きからも、オートマにばかり乗っていたのではなさそうな慣れがある。取りあえずは運転を任せても大丈夫そうだ。

ちよつとほつとした。

真紀さんは免許あるくせに、しかもマニュアルOKなのに、何故かこの車はダメだ。しょっちゅうエンストを起こし、ギアの使い方は無茶苦茶で、終いには排ガスならぬ黒煙を吹き上げさせ、この若いとはいえない車を散々酷使した。とてもじゃないけど、真紀さんには恐くて運転を任せられない。

大きいからだとか、ギアの変換の位置が分かりにく過ぎだとか色々文句を言っていたが、そもそも彼女は車自体に向いていないのだと思う。確かにこのギアは柄の部分が長くて、トラックみたいで慣れないと妙な感じがするけれど。

でも、何で真紀さんはこれでバイクならOKなのかが不思議よね。

ホント、世の中には矛盾が一杯だ。

相変わらず、もの凄い唸り声を上げてエンジンが回っているために、眠気が少し飛んだ。

それからほどなくして、新鮮野菜市場に辿りついた。

「おばちゃん！そのバナナ、1箱で幾ら？」

「あら、容子ちゃん。今日はまた随分早いねえ」

「ああ・・・まあね」

「おや、新顔かい？」

市場はすでに朝早くから活気に満ちていた。

野菜と果物の香りで溢れている。すがすがしい朝の匂いとこの活気。自然にそれにつられて声が大きくなる。雑然としていて競り落としている八百屋や業者のおじさん達の声があちこちに飛び交っている。

こつこつ活気は好き。自分まで元気になっていく。

そこで、すでに顔見知りになっていたおばちゃんの目が後方に流れて、容子はああ、と口を開きかけた。

「容子ちゃんの彼氏かい？」

「は？」

絶妙のタイミングで言いかけた先を折られて、あまつさえ予想外の一言に、しばしコメントできずに固まった。

「嫌だよう容子ちゃんてば！は、なんて照れなくっても良いのに。カッコイイじゃないの、今風で背も高くって」

赤ら顔でおばちゃんは何がおかしいのか、あはははと明るく笑った。

「いや、あの」

「へえ、容子ちゃん、何だ。今日は彼氏付きか！お安くないねえ

「！！いいねえ、若いってのは」

隣りのおじさんまでがっはっはと笑う。

「いや、だから」

「兄ちゃん背が高いなーあ。何センチだ？」

「185センチです」

いや、だから・・

「へえ、良い体格しているねえ。なにかスポーツやっているのかい？」

「あー、バスケット」

だから、ちょっと待てーっ

何故か和気藹々と無敵のおじさんおばさんコンビに無愛想な本郷篤が喋っている。

肝心な所を流したまんま井戸端会議をするな！！人の話を聞け！

・！！

ここで流されてはかなわない。こぶしを握る。

「あのっ」

「やったね、容子ちゃん！今日はお祝いだよー。何でも持って行きな！バナナだけかい？」

「おっと太っ腹！さすがはおかみさんは心意気が違うねえ」

「やだよ玄さん、おだててもあんたにやなにも出てこないよ！」

そうは言うものの、嬉しそうにまたけたけたと笑う。

底抜けに明るいおばちゃんだ。

「そうかい！んじゃ、俺とこでも大放だ！好きなの選びな！大負けに負けとくぜい！」

擦じり鉢巻も勇ましく、おじさんまで気風の良い所を見せる。薄いビニール袋を持って、準備万端だ。

いや、だから・・・彼氏じゃなくて、バイト・・・なんだけどな

「ほら、どんどん言いな！」

くつと拳を握り締め、リストを思い浮かべる。
そりゃもう速攻で、品物を指していた。ここで気が変わられちゃ
ーお終いだ。

「んじゃ、これとこれと・・・あとのイチゴも！」

「よっしゃーっ」

指示どおりに手際よく商品を袋に入れていく。

結局訂正の台詞は涙を飲んで胸の中に葬られた。

タダってのには魂売っても逆らえない！経費削減。経費削減よー。
カートに乗せるだけ乗せて、残りを本郷篤がダンボールを一つ担いでくる。黄色のバナナがきらりと口からのぞいていた。

菜の花のお出迎え

その5 菜の花のお出迎え

調子良く魚市場に肉市場を経由すると、スーパーが開く時間帯になってくる。そこで必需品を買い込む。

トイレットペーパーにティッシュにサランラップ。牛乳とかの乳製品。次が酒屋。

結構山間で寒い地方だからか、おじいちゃん達は結構皆お酒を飲む。いける口の人が多いので、酒屋では結構な量の日本酒を買い込むことになる。それを積むと、もうワゴンはパンパンに一杯になった。

それらに場所を脅かされながら、何とか体一つを席に押しこむと、ようやく真紀さんが寝ぼけ眼をしながら起きてきた。

寝過ぎだよ、真紀さん……。いつもより寝ているでしょー。

「おっやー。おはよう、篤君。容子すごいねー。もうそんなに回ったんだ?」

上体を後ろにひねって真紀さんは目を丸くする。

「もう11時回っているよ。よくまあこんな所でぐうすか寝ていられるよね」

怒る気力も失せて、ひたすら呆れたように真紀さんを見返す。

空気を振るわせる轟音のエンジンも、クッションの良くないシートも、真紀さんにとっては何ほどのことでもないようだ。まさにメガトン級に太い神経。ここまでくるとうらやましくなってくる。

「次はもう村よ」

「そっかー。久し振りだなー。サヨおばあちゃんとか元気かな？電話でしか話していないからね、ここんとこ」

それもこれも、真紀さんがこれを運転できなかったせいだ。

初めは二人で乗ってこうして集めていたんだけど、そのうち手が回らなくなった。

事務所がなかった時も自分のマンションを臨時のそれにしていたんだけど、荷物の受け取りやら電話の対応やらの雑用で一人は残っていないてはいけなくなった。事務所を借りるようになってからは、もちろん留守番に絶対に一人いる。それはもう、真紀さんにやってもらっただけで、この週2日の大仕事は、とてもじゃないけどずっと一人では無理。

最悪臨時でもサポートがいるってことで、急遽バイトの募集をかけたということだ。

郊外に出てしばらくいくと徐々に山道に入っていく。

サクラは過ぎたけれど、若葉のグリーンがとても綺麗だ。高々と伸びた木々が道路を覆い被さるようにして枝を斜めに差し上げる。降り注ぐ陽光がまだらに降ってくる。

エンジン音は凄いの、規則的に揺れる振動のせいかひどく眠たくなってくる。一仕事をして体力を使った後となれば余計に。

「あははー、そうでしょ。そう思うでしょ？皆に言われたよ。お弁当屋さんかって、ねー容子」

またそれか。

ため息を付きそうになる。

真紀さんは逆に元気一杯。にこにこ笑って振り返って来た。

「篤君に話してあげたら？そもそもこんな事をはじめようと思ったのも、こんな会社名にしたのも、全部容子が原因だもん。あのねー、元々あたし等、バイク仲間だったの」

「え、バイク？」

ちよつと驚いたように本郷篤はちらつと真紀さんを振り返る。

それはそうだろう。真紀さんは一見細身だし、背中までのロングソバージュの髪に、今だって小花模様のコットンワンピース。足はさすがにスニーカーだけど、いつもならサンダルをはいているはずの出で立ちだ。対する私はデニムジーンズにトレーナーにスニーカー。この仕事でワンピースを着る真紀さんが凄いと思う。それだけでなく私はパンツ派だからな。

「そうそう。昨日会ったでしょ、岩ちゃん。彼と3人で、ツーリング仲間だったんだー」

そういえば、ここ最近ツーリングに行っていないな。せっかく新緑の良い季節なのに。

「・・・何に乗るんスか」

やっぱり表情の読めない声で本郷篤がぼそぼそ聞いて来る。これでも驚いているんだろう。きつと。

「私？バルカンの400！容子はシャドウだよね！」

「え・・・うん」

「岩ちゃんがゼファー750だよー。次1000くらいのおつきいのが欲しいって。最近その為にお金貯めているんだってさ。何？詳しいの？篤君もバイクに乗る？」

「前乗ってました。今は車の方乗っているけど」

へえ、こいつも乗るんだ。

「そうなんだ？篤君ならカッコイイだろうなあ。何のバイク？」

「GSRっす」

「今は乗っていないの？何で？乗ろうよ今度」

「次、左ね。真紀さん、無理に誘わないの。今持っていないならすぐは無理でしょう。バイク買うのって高いんだから」

新聞の勧誘並にしつこくなってきた真紀さんを止める。

仕事は仕事。プライベートはプライベート。どうも、元々仲間って人と仕事をやりだすとそこら辺がごっちゃになって来る。特に、真紀さんはごちゃごちゃにするのが得意だ。

こいつもあんまり真紀さんみたいなの、得意そうじゃないしな。

ぶつと真紀さんが不満そうに脹れる。

「いい大人が脹れない！」

幾つだアンタは！！

それなのに、本郷篤は顔色も変えずぼそりと返した。

「いいっすよ。友達に持っている奴がいるんで」

げげっ

無愛想なくせに何でそう付き合いが良いんだ。本郷篤！！

「だってー。さっそく計画立てようよ！」

早くも真紀さんはるんと楽しげだ。

頼むから、頼むから仕事を優先してね、真紀さん……。

道を曲がると、景色はまた少し変わった。それなりの道幅を持っていた道路は急に狭くなり、車2台すれ違えるかどうかやっとうところ。しかも、カーブミラーが錆びていたりしてあんまり役に

立たない上に、もの凄いヘアピンカーブが続いている。道の片側は崖だ。今は淡い緑に覆われている谷だけど、落っこちたら、ということはあまり考えたくないくらい険しい。陽光はすっかり生い茂る木に追いやられ、直射は中まで入って来ない。

滅多に車が通らない道ではあるんだけど、時々ツーリングのバイクなんかを通ったりするから侮れない。ここが最大の難所だ。くねくねとした道をクリアすると、急に視界が開ける。段段畑が山の上のほうまで続いている。そして、出迎えるように黄色い花が畑に群をなして咲いていた。

「・・・菜の花だあ」

うわあ・・・。

思わず歓声を上げる。

圧巻だった。道沿いの畑に咲いている黄色い花花花。花の絨毯だ。一面の菜の花が揺れている。木々のトンネルをくぐってきた直後なものだから、一層目に鮮やかな色を刻み付ける。なんか凄い、懐かしいな。

思わず微笑む。

初めてこの村に来た時も、こんなだった。咲いていたのは菜の花じゃなくて、夏のなごりの向日葵だったけど。やっぱり目の醒めるような黄色い顔で迎えてくれた。

「容子、まずはサヨさんトコ？」
「ん、そう」

「はあい。じゃ、篤君まずはあの家ね！」

ひょいっと家を指す。何しろ、さえぎるものがないから、全部指で指し示せちゃう。本格的な日本家屋といった風情の大きな家に、まずは乗り入れることになった。

「こんにちはー！」

前庭の所にワゴンを乗り入れると、まるでその事を知っていたかのようにサヨさんが姿を見せた。

「良く来たねえ。容子ちゃん、真紀ちゃんも」

手に乗りそうなくらい小柄なサヨさんは、顔に一杯刻まれたしわを一層深くしてにこにこ笑った。スモックみたいなエプロンに日よけの帽子をかぶっていて、外の畑から帰ったばかりのようにも見えた。足腰はさすがにしっかりしている。スローモーだけれど、確かな足取りでワゴンの方に歩いてきた。

「今日はいつもより早いんじゃないのかい？」

「うん、そうなの。容子が・・・」

「全部スムーズだったからね、サヨおばあちゃん！」

真紀さんの台詞を遮って、大きく言う。

「一々うるさい。4時に集合させられたのがよっぽど嫌だったのだろっか。」

「ずーっと寝こけていたくせに。」

「そうだ、サヨおばあちゃん、彼が新しいバイト生だよ。本郷篤君！！」

さっそくワゴンから荷を下ろしている本郷篤を指す。

「おやまあ、随分背が高いねえ」

確かにサヨさんからみれば、小山のように大きいに違いない。まるで小人と巨人だ。

本郷篤はぺこりと頭を下げた。

彼に負けずに荷の積み下ろしに手をかける。まずは、果物野菜類をさよさんの分だけ選別し、一番下のクーラーボックスを引き出そうとする。これが魚用と肉用それぞれあって実に重い。とても一人じゃ持ちあがらないので、真紀さんと呼ばうと振りかえった。そして、別の手が伸びてクーラーボックスを引き取った。

ひょいっと一人で重いクーラーボックスを持ち上げて、下に下ろす。

「さすがさすが！力あるよねえ。篤君。やっぱり正解でしょ、容子！」

すかさず真紀さんが誉める。さっきまでこっちを見向きもしないでサヨさんと喋っていた姿には思えない。心なしか、えらそうでもある。

「うん」

ちよつとびつくりしていたんで、思わず頷いてしまい、慌てて内心首を振る。

まだまだ・・・どんな奴なのか分からないもの。

言われる前から次に肉用のクーラーボックスまで下ろしてくれたので、取りあえず魚用のクーラーボックスの蓋を開ける。

「お魚、いいのが入ったの。まだお刺身でも行けそうだから」

捌いてある切り身と尾頭付きの魚が一杯積みこまれている。その中から幾つか選り出してビニールに詰めた。

「まあ、お刺身ねえ。いいねえ。いつもありがとうね、容子ちゃん。新鮮なお魚でお刺身なんて、前じゃ滅多に食べられなかったものね。今じゃ毎週ご馳走だわ。それじゃ、さっそくヒサちゃん所も呼ばうかね」

嬉しそうにそれを受け取る。

「お酒もあるよー。ほら。今日は酒盛りなんだ？いいねえ」

一升瓶を抱えて真紀さんがラベルを指し示す。サヨさんはこう見えて結構な酒豪だ。こうしてご馳走が手に入ったりすると、たちまち近所の人達が集まって宴会になることも珍しくない。お酒の好きなもの同士、わいわいやっているサヨさん達は、本当に歳を感じさせない。

その場面が想像できて、笑えてきた。

「真紀さん、それお台所に持って行って」

「了解！」

勝手知ったるという奴で、真紀さんがスタスタと家に入って行く。

「本郷！あんたはこの果物と肉ね。台所は玄関入って左」

「それじゃ、あたしも案内しようかね」

サヨさんがのんびりと家に歩き出す。それに続いて本郷篤がダンボールを持って歩いていく。そして、残りはトイレトペーパー類。嵩張るそれらを引っつかみ、家の所定の場所に持って行く。ストックされている所に積み上げて、次にすぐ出せるように必要ならビールを開けておく。サヨさんは一人暮らし。旦那さんはすでに随分前に亡くなっている。来た時に出来ることがあれば、使ってくれるように言っておくけれど、今の所あんまり不自由はないようだ。

「容子ちゃん、ご苦労様。みんなでお茶にしましょ。前におはぎを作ってたね」

サヨさんが手招きする。

逆にこうしてご馳走になってばかりのような気がする。動いているはずなのに、一向に衰えを見せない体重の原因はこれなんじゃあと思うんだけど、サヨさんの腕は絶品。この誘惑にはいつも抗えない。付いて行くと、すでに二人は居間に座り、おはぎをご馳走になっていた。

「おいしいよー、容子！もう、サヨおばあちゃんの料理は絶品だよね！甘味もばっちり！」

幸せそうに真紀さんが笑っている。

「そうかい？やっぱり食べてくれる人がいると、腕のふるいよう

があるつてもんだよ」

サヨおばあちゃんも嬉しそうに笑いながら、一緒に座っておはぎの乗ったお皿を引き寄せる。

「篤君、甘いが好き？」

「和菓子好きっス」

真紀さんの向かいに座っていた本郷篤はおはぎに手をつけながら頷いた。

てつきり苦手そうにも見えるけどな。

意外に思いつつ、真紀さんの横に腰を下ろして同じようにおはぎを頂いた。

懐かしい味。ほんのり甘くて幸せになる。

「そっかー。じゃ、ここに来るの楽しみだねえ！」

「それは嬉しいねえ。腕をふるわなくっちゃ」

「また今年も、品評会に出すの？」

サヨおばあちゃんは、和菓子の品評会に毎年作品を出品しているのだ。おとしは銀賞をもらったくらいの腕前だ。

「そうだよ。今年は金賞間違いなしさ。また、試食をお願いするね」

「大歓迎」

相変わらず元気の良いおばあちゃんに、容子は笑った。

「容子ちゃん達が来るようになって、もう半年だねえ。早いもんだ」

「あははは、そうだね。ようやく半年！でも、順調に来ているよね？あたしもびっくりだけど」

「真紀さん……」

他人事ですかあなたは……。

「だってまさかさ思わないじゃん。1年前は容子普通のOLだったのに、いきなりこんなこととして独立しているなんて」

「確かにね」

確かに、考えもしていなかった。半年前までは。

「OLだったんっすか」

とことん表情に乏しい奴だけど、驚いているんだなというのは何となく分かる。目を見なければまだましなんだけど、目を見ると妙に迫力があるからこいつは。ドーベルマン辺りに睨まれている感じがする。

「まあね……」

頭を掻く。

「容子ちゃんが初めてここに来たのは、今日みたいな良い天気じゃなくて酷い土砂降りの雨だったねえ」

サヨさんが庭の方を向いて目を細める。

この庭先の向日葵は、今年も咲くのだろうか。

村のオキヤクサマ達

その6 村のオキヤクサマ達

「そうなのよ、篤君！この子ってば道に迷いまくってここに辿りついたのよ。全くの偶然で。ろくに地図も見ないんだから。これでバイク乗ってんだから、信じがたいわよね」

「真紀さん！今のすつごく省略して言ってくれたわね？」
むっつとして真紀さんを睨む。

「省略じゃない。簡潔に要点を述べたのよ」

こういう時だけ口が回る。いつもは無駄な事しかいわないくせに。

ちらつと本郷篤を見て目が合うと、思わず口を開いていた。

「ツーリングに行く予定で、待ち合わせをしていたの。その頃あたしはこっちに住んでいなかったから、待ち合わせをすることにしたの。そこまでちゃんとルートも確認したらよ？途中で崖崩れがあつてルートがしばらく通行禁止になっちゃって。雲行きは怪しいわ風は強いわで、仕方なく迂回路を探したの。山の中だし、戻りたくなかったし。それで、すぐに土砂降りの雨になって、この村を見つけたの」

「言い訳じみているわよ」

分かっているわよ！！

「その土砂のお陰だねえ。容子ちゃん達とこうしてられるのも人の縁なんて不思議なもんさね」

柔らかいサヨさんの声は、ぶつかり合う言葉をも優しく包んでしまふ。刺々しくなりかけた空気を穏やかにする。

肩の力が抜けて、真紀さんと目を交した。

そして、眉を落として真紀さんがサヨさんに笑いかけた。

「そーね。すごくラッキーな事だったわよ。私、サヨおばあちゃん大好きなもの」

「おやおや、嬉しいね」

りりりん！

けたたましいくらいの大きさで、電話が鳴った。

電話は居間からすぐの廊下に置いてあるのだが、手を伸ばせば届く位置らしく、サヨさんは体をずらして受話器を取り上げた。

その時の重たい黒電話の受話器を抱えているサヨさんは、置物にしたいくらい可愛らしい。体が小さい分、受話器の部分が不釣り合いに大きく見えるのだ。もちろん、ダイヤル式の黒電話だ。

電話口に響いてきた声に、相手が誰だかすぐにわかった。

容子は真紀さんと目を見交わした。

「何をぼんやりしている、ほれその坊主。とつとと上がれ」

玄関口に運んできた荷物を一瞥する前に、出迎えた人物は当然のごとく顎をしゃくる。

「東誠さん、あんまり張りきり過ぎたらまた腰がおかしくなりますよ」

たたきの上に一旦荷物を下ろして容子は男を見上げた。頭をしゃんと上げ、背はやや前かがみになっているが、不具合そうな所は見られない。足腰もしっかりとした痩身の老人だ。手には一升瓶が握られていた。

畑から戻ったばかりといった出で立ちで、やはり足元が泥で汚れている。

じろりと老人は容子を見下ろしてきた。

「別に心配してもらわんでも、自分の体の事くらい自分でようわかつとるわ」

「・・・つてまた昼間っからお酒」

「はよ上がれ！お前等来るのが遅すぎる。飯の時間が延びたじゃないか」

憤然として老人は踵を返す。

その背を見送って、後ろからやはり一升瓶を抱えて入って来た真

紀さんがくすくすと笑った。

「相変わらずだねー東誠さん。お昼は毎回ここで取っているの？」

「まあね。なんかそうなっちゃって」

本当は、こういうのってあんまりしたくない。

だって、こっちはきちんと報酬をもらってやっている仕事だから。時々ご馳走になるんだったら良いけど、ほぼ毎回ここでご馳走になっているというのはだから困っているのだ。けれど、ぐずぐずしていようものならサヨさんの所に電話で確認をとって来る。サヨさんもそこは承知していて、東誠さんから連絡が来たらすぐに行っておいでと手を振ってくれる。小さな村のこと。すぐに話しはみんなに知れる。どうせこの日の夜には東誠さんの所で容子達が何を食べたのかという献立まで村中が知ることになるのに違いない。

それはともかく、と本郷をちらりと見やる。

未だ未成年とはいえ、大学生でお酒が飲めないと言っことはないだろうが。

「篤君、日本酒飲める？」

同じことを真紀さんが本郷に尋ねる。

本郷は一つ頷いた。

「んじゃ、問題無し」

あるって・・・。

「真紀さん、運転は？」

「あんたがやりなさい。絶対に男の子ってんで目え付けられるから、篤君は」

「……………」

もはや何をいう気力もなく頷いた。

真紀さんの目がきらきらと輝いていた。

彼女は酒が大好きだ。特に、日本酒には目がない。そもそもここに運んで来る日本酒を酒屋のレパトリーから選んでいるのは真紀さんだ。結果として、自分の好みのものばかりを配達しているというわけで、期待を裏切るものはここにはないのである。真紀さんがここに来たがったのはこれが原因でもある。

それから、実に素早く荷物を大雑把に整理すると、さつそくみんなして居間に上がりこんだ。卓上には大きめの皿でおかずが並んでいる。ご飯からお味噌汁まで立派に整った昼食。

本当にこれを東誠さんが作っているのか、いつも不思議だ。

全然負けているし……。

口にご飯を運びながら、唸ってしまう。

煮物なんて未だにうまく出来ないのに、味噌汁といいおかずといまさにお袋の味だ。

その張本人は、斜め前に座ってすでに顔を赤らめているけれど。

「もつと飲みねえ！いやー、そうか。あんたが来るんか。いい飲みっぷりだ！！」

ぐいぐいと機嫌良く東誠さんはグラスにお酒を注いでいく。少しでも飲んだらそこを埋めていく。自分の分だけでなしに、真紀さんにも本郷にも。真紀さんの選ぶ日本酒は少々くせがあつて玄人好みのお酒なので、容子は匂いだけで酔いそうだ。かと言って全く口をつけないわけにもいかず、少しずつでも口をつけていると、またそこに注ぎ足されるといった具合だ。

「そーなの！篤君はねー、こう見えて大学生のバスケット部員なんだよね！力も強くつてさー。んで、いける口だよーこの子。顔色変わっていないじゃん！ひよつとしてめっちゃ強いんでしょ？」

「いや、部活の仲間にはもつと強い奴います。前来ていた早川もかなり強いし」

「そうなの？あんなにお坊ちゃんって顔していたのに」

どこかずれた所で真紀さんが感心する。

「んじゃ、今度また飲まないかねえ」

「んあ？飲むだど？どこでだ。まだ仲間がいるんなら、みんなここに連れて来たらいいじゃねーか」

「あつはつは、そーだよねえ。それなかなかいいじゃない！東誠

さん」

「だろー？そう思うだろう」

「ダメです！！」

酔った勢いで何を決めるか分らない。

「何だよ、いいじゃねーか。別に酒を飲むくらい」

「ダメです。そんなことしたら帰れないでしょう？」

「泊まればいいじゃない。容子」

真紀さんが余計な口を挟む。

「そーでい！決ってんだろー」

東誠さんは赤ら顔でグラスを高々と持ち上げる。

「決り決りー！」

真紀さんもグラスを重ねた。

「二人とも！東誠さんも飲み過ぎ！」

昼間っから本格的に二人は顔が赤くなってきた。

止めてよこんな所で……。真紀さんあなたは止める立場でしょ？！

「けってやんでえ。俺が認めるまで何度でも来るって言ったのはおめーだろうが」

「言いました！だからまた次の週も来ます！だって、私達は東誠さんの息子さんにきちんと頼まれているんですからね」

赤ら顔になってもなお眼光鋭い東誠さんの表情は、それほど強面ということでもないのになんか怖い。さらに据わった目でこちらを向かれると尚のことだ。その視線に気圧されないように、じっと見返すのは、本当はとても肝が冷えた。でも、ここで負けては仕事にならない。精一杯見返していると、舌打ちして東誠さんがグラスを置く。

「うつせーな。おめえ、まるで俺の死んだ上さんみたいにうるさい。まったく、息子に言つときな。余計な事をするんじゃないって。俺はおめえらなんぞに頼みやしねえよ」

「ご自分で言うてください。出来れば電話でもしてあげてください。東誠さんのこと、心配していましたよ。向こうからかけても全然つながらないって」

さらに舌打ちをして、横を向いた。手を振る。

「うるせーな。そんなめんどくせー。もう行っちまいな。酒はうまく飲みたいからな。次は来んでいいぞ」

その横顔にさらに口を開きかけて、容子は再び口を閉ざした。

いつものことなのに、この自分勝手な老人に突き放されると、や

たら悲しくなってしまう。これ以上というのは逆効果と判断して、容子は立ちあがった。

「また来週来ますね」

東誠さんはやはり背中を向けたまま、うんともすんとも言わない。

残りの二人を促して、再び車に乗りこむ。

すでに半分眠っている真紀さんは、何とか助手席に乗せた所で瞬く間に寝込んでしまった。酒が入ると寝つきがいいのも真紀さんだ。運転席に着こうとしている本郷を振りかえった。

「運転代わろうか。飲んでいるでしょ」

「いや、大丈夫っす。一杯も飲んでいないし」

確かに顔色一つ変えていないし、全くのいつも通りだ。相当酒に強いのか、それとも顔に酔いが出ていないだけなのか。

大丈夫そう・・・かな。

頷いた。

「分かった、じゃあ次ね」

容子は車に乗りこんだ。

しかし、良く働くじゃない。

かなり意外である。

今時の大学生。自分の時とも考え合わせると、まあ真面目な子はとことん真面目に働いていたが、もちろんそうでない子はひたすら楽をしようとしていた。どちらかといえば、後者かなという印象があった。ぬぼつとした印象だし、そのくせ目つきはやたら悪い。体格は良いが、言われたことだけこなせば上等の、気働きのない子という印象があった。それが、良く動く。こつを掴めば、一人できびきびと動かして荷物を下ろしていく。無愛想で無口だが、やるべきことはきっちりやる。

そればかりか、予想に反しておばあさん方に妙に人気があった。実はそれが一番意外に思っていたりして。

開口一番、初対面のおばあさんから、

「あんたが篤君？ いやー良い男だねえ！！聞いていた通りだ」と嬉しそうに言われるのだ。

やはり、嬉しくなさそうに見える無愛想な顔ではあ、と本郷が答える。

それを見て、つくづく侮れないネットワークだと思ったりする。女子高生並みの情報の速さだ。

「背が高いねえ」

感心して一通り本郷を見て終わったみよおばあちゃんが、今度はニコニコとこちらに振りかえった。

「容子ちゃん、聞いとくれよ。今度私の娘がアメリカさんに行くんだと。随分長いこと行くらしくてねえ」

「へえ、そうなんだ。凄いね。旦那さん仕事何やっているの」

「何だっけね……。難しいこと言っていたわ。とにかく、急に決った話でな、もう今月末には出るんだってよ。まだはっきり決っていないみたいなんだけれど」

ちよつと目を見開く。

「随分急じゃない。月末ってもうすぐよ？」

「そうなんよ。それで、近くの飛行場から經由して向こうに立つて聞いたから、それまでにあたしが作った佃煮、持って行ってもらおうと思ったんよ。さすがに見送りには行けんからね。旅行じゃない海外は初めてだからねえ。不安そうだったし」

四角い大きなタッパーを持ち出して来る。中にはぎっしりと佃煮が詰まっているようだ。手にするとずっしり重い。

容子は笑顔になった。

「任せておいて。みよおばあちゃんの佃煮、おいしいもんね」

みよおばあちゃんは赤ら顔でからからと笑った。

「嫌だよ。誉めても何も出てこないからね」

ここのおばあちゃんは皆元気だ。

この相変わらず、が嬉しい。

「他にはない？」

「そうねえ。そうそう、野菜これ、うちで獲れたの持って帰んな」

「いつもありがとう」

キャベツにタマネギ、山菜などを入れた籠をくれる。

「いいのよ。そうだ。次は布を少し買ってきてくれるかい？サヨちゃんがパッチワーク始めたって聞いて、あたしもやろうかなって。ああ、おじいさんには内緒ねー」

縁側で本郷と話しているおじいさんの方を見て、こそこそ声を潜める。可愛いパッチワークを作ってびっくりさせると言っただ。

くすくす笑いながら、頷いた。

「分かったわ」

全部を回るともう夕暮れが迫ってくる。

追加された注文や預かりもの、そしておすそ分けにもらった野菜や果物がワゴンをまた一杯にしている。

真紀さんはまだ良く眠っている。この分では着いてから起こすのに苦労しそうだ。

運転席の本郷を見やった。

荷物の上げ下ろしは結構な重労働のはずだけれど、見た目には全く平気そう。口数が少な過ぎるけど、問えば答えるし、村人の反応もまずまず。

かなり辛い点をつけたくても、今の所非の打ち所はない。

合格、かなあ・・・。

覚悟していたのがあまりに酷かったせいかもしれないけれど。あの真紀さんの適当な人選が当たったなんて思いたくないけど。でも、それを差し引いても想像以上の人材だったようだ。

「ねえ、今日1日やってみてどう？」

本郷は、自分からは何もいわない。そりゃあ、周りが年上の上司ばかりじゃ、素直に言えないのかもしれないけど。どこまで本音が出るかな、と気軽に聞いてみた。疲れたとか、それほどでもないとか、早起きが辛いとか、そんなことが返ってくるかなと思っただんだ。

村のオキヤクサマ達（後書き）

飲酒運転は絶対に止めましょう・・・ネ

お日サマの理由

その7 お日サマの理由

「良い所つすね」

返って来たのがその一言で。

すごく意表を突かれて、ルームミラーの本郷を見返した。その小さな驚きが弾けるような嬉しさに変わった。

だって、最初からそう思ってくれるなんて思わなかったから。体力的にハードで、いろいろコミュニケーションもとらないといけないくて、1日で回らないといけない軒数も決っていて、どうしても過密スケジュールになってしまう。こき使うだけこき使われている、そんな言葉が出てくる場合もあると思っていた。

「本当にそう思う？あんた見る目あるよ、本郷！」

思わず後ろの座席から身を乗り出して、頭をくしゃくしゃと手で撫でる。

「わっ」

その手を逃れようと、本郷が前のめりになる。

「私ね、私もあの村が大好きなの！」

「・・・分かります」

ようやく手を逃れた本郷が席に落ちついた。

あら、ばればれ？

それでも嬉しくて、口元がにまにまと緩む。その背もたれの所に寄りかかりつつ、こめかみを搔いた。

そんなに分かるのかな。

「一度、恩を受けたんだ。それを返すって意味でもこれをやりた
いと思ったし、何よりあの元気なおばあちゃん達に会いたいと思っ
たしね」

本郷は真っ直ぐ前を向いて運転をしていたけれど、何故かじつと
聞いてくれているような気がして続けた。

「酷い雨の日で・・・私がここに迷い込んだのは本当に偶然なん
だけど。もう、あの日ほど最悪な日はないって思えたわ。道には迷
うし、雨は止む気配は見えず、酷くなる一方で、バイクでじゃあ絶
対にこのままだと事故になるって思うくらいだったの。暗くてね。
この村に至る道、やたらカーブがいっぱいあるでしょ。踏み外した
ら一巻の終わりだしってそりゃあ恐かった。それで、ここに辿りつ
いたんだけど、今度はバイクが溝にはまっちゃって」

雨で増水したために、道が全部水溜りになってしまっ下も見え
ないし、お手上げの状態になった。それで、一番近くの家だったサ
ヨおばあちゃんの家に転がりこんだ。

「酷い格好だったと思うわ。上から下まで全身びしょぬれだし、夜になっていたし。さよさんも良くこんな見も知らない人物を家に上げたもんだと思うわ。そこで、待ち合わせていた真紀さんたちに電話をして、1日泊まらせてもらって無事に辿りついたの。さよさんは、それだけって今でも笑ってくれるけど、私にとってその1日が運命の分かれ道ね。その日があるから、今こうして笑っていられるのかもしれないもの」

我ながら調子が良いと、ちょっと笑う。

最悪な日々。悪いことは続くものだと思っていた。もう本当にあの雨は、自分の心情そのまんまだった。真っ暗な中で、光を失わずに目を引いたもの。力尽きて、座りこみそうになった。もう絶対に立ちあがれないと思っていたのに、その雨に煙る灰色の空をバツクに見つけた、黄色く光っていた季節外れのお日様色の向日葵。それが、こっちだよって誘っていたのだ。雨は必ず上がるから。いつしか道は薄暗くなって来ていて、ライトをつけていた。

「この屋号って、容子さんがつけたんですか」

え・・・っ

容子は前の本郷を見返して真っ赤になった。

喋り過ぎた。

ついつい、聞いているのか聞いていないのか分からないように静かだから、調子に乗ってべらべらと話してしまった。しかも、口を閉ざしてから随分経った後にこの不意打ちの質問だ。

躊躇ったのは一瞬。

「そうよ・・・私。言っただでしょう、恩返しがしたかったって」

うわああああっ ものすごく恥ずかしい。

口にチャックよ。これ以上喋らないんだから。

頬が熱くなるのを自覚しながら小さく唸る。幸い夜で、顔の表情なんかは分からないだろう。それでも、のた打ち回りたくなるくらいに恥ずかしさに耐えていると、やっぱり全くそんなことに気付いていないような本郷はいつもどおりに口を開いた。

「良い名前っすね」

何か・・・何か本当にこの子って。

一瞬ぽかんとして、言葉が出なくなった。

それからくすくすと笑い出す。

胸のど真ん中に投げる直球ストレート。

嫌がるのは分かっている、再び頭に手を伸ばし、意外に真っ直ぐで柔らかい髪を乱暴に掻き回す。

「良い子っ」

うん、今度ばかりは真紀さんの人選が当たったのかな。

けれど、当分そのことは真紀さんには言わない。どうせもつと調子に乗るに決っているから。

「雨、降らないよねえ？」

どんよりと雲が立ち込めてきたのを見て、真紀さんが不安そうに上を見上げた。立て掛けてあるハシゴ。その上の方で作業している岩村を見てだ。

「真紀、今日は大丈夫だったんじゃないのか？」

その不安が伝染したように、岩ちゃんが下を見やる。

事務所の外側の壁を塗っているとところなので、雨が降ると流れてしまう。

「真紀さん、！」

一面の半分くらいすでに塗り終わっている。

今から言われても遅い。

「いやーだって、天気予報じゃ確かに大丈夫そうだったのよ。くもりだけど、雨の確率30%だし」

「30%でも降る時は降るのよ」

「30%なら、ほぼ降らない、でしょー」

「違うーっ」

がつくりと下を向いた。

朝方結構天気良さそうだったから、油断して天気を確認しなかったのがそもそもの敗因だ。

「一旦そこまでにしよう、岩ちゃん。雨降ったらなんにもならないし。来週にまた塗るわ」

「そうすつか」

岩ちゃんがハシゴを軋ませながら下りてきた。

「はつきりしない天気だな」

「ん」

刷毛とペンキのカンを受け取ろうとすると、岩ちゃんは首を振ってそれを引き離れた。

「手が汚れるぞ」

「私、何か上で用意してくんね!」

真紀さんが休憩と見て勇んで上に駆け上がる。

こついつ時だけ元気なんだから。

代わりにハシゴに手をかける。

スライド式になっているそれを、ゆっくりと下ろした。手早くペンキ類を片付けた岩ちゃんが運ぶのに手を貸してくれる。

「あのなあ、容子。この前、偶然雪村さんに会ったぞ」

躊躇いがちに岩ちゃんが口を開く。

思わず容子は岩ちゃんを見返して、視線を落とした。

「元気かって聞かれた」

意表を突かれて、どんな顔をしたらいいのかわからなくなる。

「そ・・・か。こつちに、戻って来ていたんだ」

「ああ。こつちに配属になったんだと。一応、このことは言わなかった。元気だったことだけ言っておいたぞ」

「ありがとう」

ほっと息をつく。

雪村さんは前の会社の人だ。上司だった人。優しくて、頼り甲斐があつて、皆から慕われていた。

会社を辞めて、もう会うこともないだろうって思っていた。それなのに、近くにいるなんて。どこか出来過ぎている。

「その・・・容子はもう、雪村さんには会いたくない、か」

「当分は、ね」

「だよなあ」

バリバリと頭を掻いて、岩ちゃんは階段を上がって2階の物置部屋にはしごを下ろした。

「そう思っただけど、とにかくこれ、渡してくれて頼まれた」

軍手を外して、差し出したのは真っ白な名刺だ。

雪村聡って真ん中にくつきり黒い文字。事務所の住所と電話番号と、その下に手書きできつちりと書かれた携帯電話の番号。

「真紀がいたらうるさいからな。いらなら捨ててくれ」

「うん、ありがとう」

なんとかそれを受けとって、ポケットに突っ込んだ。

「ああ・・・うん、その・・・悪いな」

大きな体で、精一杯縮こまる。その顔が、申し訳なさそうだ。

「頼まれて嫌と言えなかったんでしょ。らしいね岩ちゃん。大丈夫、多分そのうち、整理がつくから」

だから、それまでは見ないようにしよう。

今はまだ、向き合う気もないけれど。そのうち、気が変わるかもしれない。

扉の合間から楽しい笑い声が響いてきたので、また真紀さんがどこかに電話しているのかと思って戸を開ける。

「きゃっはっはっは！いいっ　これいい！意外な才能だねー」

「そうっすか？」

人数が・・・いつの間にか人数が増えているし。

パソコンの周りに団子になって皆が固まっている。

「遅かったねー、二人とも！見てみて。早川君がホームページのキャラクターを作ってくれて。なかなか可愛いんだよ！」

「こんにちはー」

早川もこちらを振りかえり、ニコニコと笑う。その後ろに無表情な本郷。

何故ここに・・・。

今日はバイトの日、じゃないはずだけど。

まさかまた・・・っ

真紀さんが？電話で無理やり呼び出しのたのか？

「真紀さん。だから何度も言っているでしょう？人を巻き込むのもいい加減に」

「ああ、違うんです。容子さん。俺らバスケの練習終わった所で、この後ヒマだからたまたまここに顔出しただけなんです。すみません、迷惑でしたか」

申し訳なさそうな顔でそう説明され、逆に容子は慌てた。

「ううん。そんなことない・・・けど」

いや、でも大学生で遊びたい盛りならこんな所にこなくってもやりたいこといろいろあるだろうに。

「容子はすぐ私を疑うんだからー」

真紀さんは脹れるが、これは自業自得。日ごろの行いが悪いんだからしょうがない。

「で、ちょっとホームページ作ってみたんですよ。これから作って聞いたんで、良ければ見てもらえますか」

画面を覗き込むと、メインページは太陽のイラストが踊っていた。太陽の炎の部分と眼の部分が動いていて楽しい。特に、目が見開いたりにつこりと笑ったりしているのが面白い。それを作ったのが、背の高いスポーツ青年であることになお可笑しくなっていくと笑った。

「どうです？」

「可愛いでしょー？」

「うん。可愛い。これ、全部作ったの？」

「そうです。良かったら使ってもらえますか」

へえ、なんか意外・・・。

こづいつの、作るんだ。

まあ、この子が運動部つても驚いたけどさ。一見文化部っぽいし、お洒落な青年って感じなのに。

「もちろん」

ホームページは作る予定だったからパソコンも事務所用を買ったんだけど、製作はできる奴いなかったからもう少し余裕資金が出来てからって思っていたんだ。ラッキーかも。

「でねー。彼もここで働いてみたいって！ちょうど良くない？パソコンのコト頼めるよー」

「ええ?! まじで?」

びつくりして相手を見返す。

「はい。希望っス」

えええええ？！何でまたこんな所に。

「早川、お前いきなり何言っているんだ。すみません」

ぼそぼそと本郷が割りこんできて、早川の肩を引く。軽く頭を下げられて、そっちの方が焦る。

「いや、別に、謝らなくっても」

別に困っている訳でもないし。強いて言うなら困惑、しているけど。

「ま、事務所に真紀だけじゃないほうが良いんじゃないか。プラスアルファ、HPやってくれるんならいいんじゃない？」

すでに前回顔見知りになっているからか、岩ちゃんも丸太の様な腕を組んでそんなことを言い出す。乗り気なくらいだ。もちろん、乗り乗りの真紀は、眉をひそめてじと目で容子を見ってくる。

「何？容子反対なの？」

「いや・・・反対じゃないけど・・・」

「じゃー、いいじゃん。文句なし、でしょー」

いや、別に文句あるわけじゃないんだけどさ。こんな不安定な職場に、バイト君ばかり増やしていつて良いのかしら・・・。

「だってー。容子も了解したから、じゃあ晴れてうちで採用ってことで、よろしくねー早川俊之君」

だから、何だつてあんたはそうお手軽になんでも決めちゃうわけ？！

「あの・・・早川君？一つ言っておきたいんだけど、うちってば今の所大した時給払えないよ？おまけに、お願いするのフルタイムじゃないし、不定期になるかもしれないけどいいの？」

他のバイトが出来なくなる可能生が出来て来るし、遊びの計画とかも立てにくいかもしれない。給料は大したコトないし。かなり条件悪いと思うんだけど。

しかし、早川はさわやかに笑った。

「ああ、それはこいつからも聞いていますから。大丈夫、いいですよー」

そうあっさりと言われては、これ以上いうことはなくなるけど。

「分かったわ。よろしくね」

「よろしくお願いします」

うーん。いいのかな。

そう思っていたら、本郷の顔が目に入ってきた。

珍しい。いつもほとんど動かない無愛想な顔が。戸惑ったような困ったような顔している。

「どうした、篤。そうか、俺がいつしよに働くのがそんなに嬉し

いか」

その顔に、にんまりと早川が笑う。

「ち・・違つ」

みんなの注目を集めた本郷は、さらに慌てた。

「照れるなつて。こいつ、こんなでかいなりしているくせに肝が小さいんですよ。ただでさえ人相悪いのに、緊張すると脅しているような目に見えるでしょ。だから、一人で出歩かせたら大変で。前なんていかにもその筋のお兄さん達に因縁つけられてましたしね」

「早川っ」

際限なく喋る早川の口に、本郷が飛びつく。

「けれど一番ダメなのが女の子なんですよこいつー。だから、こ来てびっくりして。周り年上の女性ばかりの中で働いているって言っんですからね。これはもう、見に行かないと損だと」

ひょいっと素早くその手を逃れて早川は容子の背後に回りこむ。盾にされて、容子は少なからず慌てた。

ええ?! ちょっと・・何故こっちに・・。そんなことされたら来るじゃないかあ。

「早川あーっ」

ぐるって振り向いた鬼気迫る感じの本郷と目が合う。腰が引けた。

だからその目つきが恐いって・・・え？

目があつた途端、見ものだった。怯んだのは本郷も同じで、それ以上に頬が真っ赤に染まっていたのだから。

これは、凄いかも。

思わずぽかんと見ていると、本郷は口元を押さえて横を向き、早川が笑いながら本郷の肩を叩いた。

「ねー、可愛い奴でしょ。前髪を伸ばしているのも、この意外な赤面性見られるのが嫌なんですよ。それでもっと目つき悪く見えるつてのに、馬鹿ですよー」

「うるさいっ お前は黙れっ」

真っ赤になっている本郷が、後ろから首を締める。

「うーん、そうか。篤君が可愛いのは知っていたけどここまで可愛いとは、知らなかったわ」

真紀さんが感心したように言ってくすくす笑った。

「でしょー？ からかって遊ぶと楽しいんですよ、これが」

「早川！！」

びりびりって部屋が震えるくらい大きな声。

嫌、何かすつごくびつくりした。意外と言うよりも、驚きすぎる。
事務所が広いのを良いことに、二人は実に仲良くじゃれ合っている。

なりは大きいが、まるつきり子どもだ。

「元気だよねえ」

真紀さんが笑うのにつられて、容子も笑い出していた。

春の嵐

その8 春の嵐

ええっと、後はおばあちゃんから預かった佃煮をクール宅急便で出しておいて、それからこのゴミを処分、と。先に買出し行った方が良いかな……。

リストを見て唸っていると、電話で話していた真紀さんが振りかえる。

「容子！これから来るって、篤君達。来たら買い物先に行ってきたら？確か、ラグとか大きいもの頼まれていたよね。ちょうど良いじゃん」

「んー、じゃあそっしょうかな。真紀さん、お昼くらいにゴミ収集車が来るからゴミまとめて出しておいて」

「了解！げげっ 容子これっ 何か洩れてきているよ」

見ると、おばあちゃんから預かってきていた佃煮の袋だ。

「あっちゃー。水分ほとんどないと思ったのに。これ今日の午後に送らないと」

テーブルの上に汁が染み出して来ている。慌てて手近なビニール袋……ゴミ袋に入れてテーブルを拭く。

真紀さんが首をかしげた。

「じゃ、なんか別の入れ物の方が良くない？ついでに買って来なよ」

「その方が良いね。これじゃ、すぐにまた洩れちゃう」

じゃあそれもリストにいれて、と。

「あれー？ほらほら、来たみたいだよ！」

真紀さんが窓を開けて下に手を振る。

「そういやーさあ、早川君も入ったことだし、また顔合わせってことで本当に飲みに行かない？」

「・・・帰りの運転は？」

仕方ないなあ。

脹れていた東誠さんの顔が目には浮かぶ。

でも、サヨさんにもあんまり飲ませちゃダメだって聞いた。実際にそれで一度倒れかけて、びっくりした。本人は、飲まないで生きるより飲んで死ぬ方が良くいって言っていたけど。

本当に目の前で見張っていなくちゃ。

「もち、容子」

あのねーっ

なんで私だけ飲めないのよ！

「何だかんだ言って寂しいんだよ、東誠さん」

分かっているわよ。

「・・・ただし、あんまり飲ませちゃダメだからね」

「分かっているって。んじゃほら、行つといで」

「ん。じゃー後よろしく」

そうしてまたあの音量のでっかいワゴンに本郷を運転手にして一路買い物へと出かけて行った。

今日はなま物以外の書物やら薬やら服等が目的だ。最初に本屋やドラッグストアら辺を回って、ホームセンターへ。

ここの買い物は随分手間がかかった。一番の大物のかやとかラッグとかまであるから。

「一旦ここで切り上げるか。別のホームセンターにも行かないといけないし」

「すごいっスね」

「え？」

運転席に乗り込んだ本郷を振りかえると、本郷はすぐにエンジンをかけて車をスタートさせた。

「寸法も全部測って来ているんっすね」

「そりゃーそうよ。持って行って、合わないからって返すの私達だし、おまけに組みたてるのも立て掛けるのも手伝うもの。日曜大工みたいなこともしているわ」

「へえ。釘、打てるんスか」

う、いたい所を・・・

目が泳ぐ。

「・・・慣れよ慣れ。でも、この仕事始めるまでは全く打てなかったの。おじいちゃん達の方がうまいくらいなんだけど、目がもう良く見えなかったりするでしょ。だから、コーチしてもらいながらこつちが必死で組みたてたりするの。お陰でうまくなったけどね」

そして、そんなことをしているから手が足りなくなってきたんだけどね。それまでは日用品や食料品のみ週一で持って行っていたから。それ以外の配達で週2、3の配達になり、そのうちおじいちゃん達を乗せる簡易バスのようなものもやるうかって言っているんだけど。

「女の子で釘打てる人って珍しいっすね」

「そうかな。成り行きで、何となく・・・確かに私達がやっているのって配達だけだね。私はモノだけの配達はやりたくなかったん

だ。私はおばあちゃんにあの夜沢山のものをもらったから。今度は私がそういうものをあの人達に運びたいなって」

お日様みたいに、ぴかぴかの何かを。

そう思っつけて付けた屋号なんだけど……。やっぱり、これを口にするのは恥ずかしい。真紀さんが聞いたら笑い死にしそうなくらい私ってば恥ずかし過ぎ〜っ！！

こいつだといついつい口が滑るよーっ

かあつと頬が赤くなってちらつと本郷を見るけれど、やっぱり本郷は笑わなかった。

「お日様を運ぶんっスね」

すごく当たり前みたいな顔で、さらりとまた凄い台詞を言う。

だから何だか、この無表情が妙に可愛く見えるのかもしれない。

思わず笑いかけたところで、電話が鳴った。

あ、携帯。真紀さんから？

お昼の相談かなー。

呑気に考えて、電話を取った。

「はい？」

『容子！大変！……だから……っ』

「真紀さん？真紀さんちょっと、聞こえない」

『戻っ……て！東誠さんが、倒れたのよ！！』

真紀さんの声は、まるで悲鳴のように聞こえた。

「真紀さん！！」

二人しかいないはずの事務所は、俄かに殺気だった空気が漂っていた。

「容子、救急車が今出払っているって。30分待ってくれって」

「待つてって……容態は？また発作？」

真紀さんはいつにない厳しい顔で頷いた。

「さっきサヨさんから連絡があつて。倒れていたんですって」

「ダメですよ、真紀さん。やっぱり肝心の車がない。病院は県立に連れて行ってもOK取れたんですけど」

受話器を置いて、早川君が切迫した顔で振りかえる。

うそ……どうしよう。

東誠さん・・・。

棒立ちになって、頭の中が真っ白になる。前の発作……。あの時も、酷く苦しそうだった。お医者さんからは発見が遅ければ危険だったって。

「容子！村に行くよ」

「え・・・」

ぐっと腕を引かれる。厳しい顔の真紀さんが振り返った。

「うちの車があるでしょ。あれで運ぼう」

「じゃあ、俺残っています。また連絡があればこっちから電話するんで」

「お願い」

いつものとろい真紀さんとは信じられないくらいのフットワークで、ワゴンから荷物を下ろすのを手伝い、ワゴンに乗りこむ。運転席には本郷が座り、真紀さんが助手席。容子は後部座席に座る。車がスタートしてしばらくしてから、真紀さんが口を開いた。

「倒れてどれくらいなのかは分からないの。意識はあるみたいだね、電話口までは行ったみたいんだけどそこで力尽きていたみたい。畑にいつもの東誠さんの姿が見えないからってサヨさんが見に行ってくれて発見。で、すぐにこっちに連絡してくれたの。意識はあるけど呼吸がかなりきつそうだって。息子さん達には連絡してお

いたから」

それでも離れている場所に住んでいるから、息子夫婦が駆け付けるまでには時間がかかる。

村につくまでが嫌に長く感じられた。

村にようやく着いて東誠さんの家に車が止まるや否や、家の中にかけ出した。

「サヨさん!!」

「容子ちゃん、こっちっ」

たたきを駆けあがると、東誠さんはまだ廊下に倒れたままだった。サヨさんがその頭を膝に乗せて、手をしっかりと握っている。

「東誠さんは?!」

「大丈夫」

強張った顔ながら、サヨさんはしゃんとして頷いた。

その視線に、唇をかねて容子は頷き、側に膝をつく。

「救急車が来れないんです。私達の車で運びます」

「頼むよ」

ようやくサヨさんは少しだけ頬を緩めた。

県病につくまでの間、真紀さんが症状のあらかたを医師に説明する。もちろん専門家ではないので、素人としてしか報告は出来ない。すっかりとした声が、医師の指示にしたがってきばきと答えていく声を耳で聞きながら、片方の手を握り締めていた。

冷たい・・・。

その手が、酷く冷たいことと、真つ青な東誠さんの顔。ぎゅっと固く目をつむり、片方の手が胸を押さえている。

筋張った手は、かさかさに乾いて冷たく、死人のようだ。

何も出来ない。ここに座って、手を握っていることしか出来ない。

どうしよう。もしこのまま目が開かなかつたら。どうしよう。どうしよう。

ぐるぐるそんな嫌な考えばかりが頭を回る。

私・・・どうしよう。

県病に着くと、すでに医者達が待機していた。すぐに担架に乗せられて運ばれていく。そのまま、東誠さんは運ばれて手術室に入り、扉が閉ざされた。

見たことあるよ、こういうの。よくドラマでもある。手術ってランプが点いて、その扉の前で深刻そうに親族が待っていたり恋人が待っていたりするの。

妙に時間が長いんだよね。

時計の針が、一つ一つ確かめながら回っているみたいに。針が進む音だけが響いていたりして。

どうしよう。

ぐるぐると出口のない疑問がまた浮いて来る。

「容子、ちょっと落ちついて座りなよ。息子さん、あと2時間くらいでこっちに着くってさ。大丈夫だって。東誠さん、あたし等と飲むまで死なないよ」

「真紀さ・・・」

肩を引かれて前のいすに腰を下ろす。

一人じゃ抱えきれなくなった言葉が、思わず口からこぼれた。

「私、ね。崇さんに言ったのに。大丈夫だからって言ったのに」

「分かっている。ほら、しっかりしな。勝手に殺したら、東誠さん怒るわよ」

ぺしっとおでこをはたかれて、思わず目を閉じた。

「うん・・・」

そうだ。しっかりしないと。

「また泣いていたって東誠さんに言い付けるわよ」

「な・っ 泣いていないわよっ」

真紀さんーっ あなたまた余計な事を！！

慌てて目じりをぬぐって、頬をはたく。ぱんと大きな音を立てて頬が鳴った。

気合い！

「内倉さん！牧野さん！！」

ばたばたと、息子さん夫婦が駆けつけてきた。

謝れば、それで済む問題じゃない。人の命にかかわることだ。

けれどそれだけしか出来なくて、頭を下げた容子に、息子の崇さんは苦く笑った。

“仕方ないんです。父が選んだ、ことですから”

手術はなんとか成功し、一番の危機は脱出しているが、集中治療室にてまだ意識が戻っていない。どちらにせよ、しばらく入院することは余儀なくされた。次の日の朝まで付き添っていたが、真紀さんに病院から追い出された。今日は配達をしなければならぬし、入院するならそれなりの準備もある。それらを取りに行くのだ。

あのばたばたの中でいつの間にかちゃんと本郷も早川も家に帰したみたいだし。今日の真紀さんには全く頭が上がらない。いつまでもこうして皆が雁首そろえていても東誠さんが起きない事には仕方がないので、腰を上げた。

「あんたの仕事、でしょ？」

容赦なく真紀さんにそう言われたこともある。

真紀さんはそのまま病院に待機。何かあつたら知らせてくれる。事務所は早川君に任せるらしい。

しつかりしろ、私。いつも通りしゃつきりして。ぱん、と頬を両手で叩く。

病院まで迎えに来てくれた本郷の運転するワゴンに乗り込み、先週と同じルートを辿る。

この日ほど、本郷が無口だということに助けられた日はない。八百屋のおじちゃん達とは元気にやり合っても、車の中ではそんなこと気にしないでいい。ひたすら車の窓から景色を見ているだけいいから。

携帯が気になるけれど、ぐっと堪えた。

どうせ病院の中じゃ、電源切っているだろうし。何かあれば、教えてくれるって言っていたし。

「寝て下さい」

「え？」

「酷い顔っすよ」

げげげっ そう言えば、化粧もしていないじゃない！

蒼白になって鏡を取り出す。

「馬鹿——っ 気が付いていたならもつと早く言ってよ！八百屋の親父さんにも見られたの?!」

鏡を見ると、これ誰ってくらい疲れ果てている顔が映った。

顔はどこか青白いし、目には隈が浮いているし、化粧つけはないし、構っていなかったとはいえ本当に酷い顔色だ。

道理で妙な顔していると思ったよ。親父さん……。

化粧で誤魔化すか？出来るかな……。こんな酷い隈。

そもそも、コンシーラなんて入れているっけ？ほとんど使ったことないからなあ。

でも、これを世間に見られて……。かなり泣きたい。

「着いたら起こします」

「平気！」

それより、お化粧しなおさないとーっ

バックからポーチを引っ張り出した。本郷も男性の枠に入るが、仕方がない。今日だけは特別って事でここで直そう。

人前で化粧直しなんてするもんじゃないと思っただけに嫌なんだけど、でも瀬に腹は代えられない。こんな顔のまんま村に行ったら逆に心配させちゃう。それだけは絶対にさせちゃダメ。

「うわあっ」

その途端に、前につんのめって放り出されそうになった。軋みあげそうな音がして、急ブレーキ。ポーチが手から転がり落ちる。

「ちょ・・・本郷？」

危ないじゃないの！顔を上げて睨もうとすると、強い目線がまっすぐにこちらを見ていた。息を詰める。

「寝てください」

うーーーーーっ

にらめっこ。30秒。

「・・・分かったわ」

負けました。

妙な迫力に押されて、頷いたものの、眠れる自信はない。

けれど目だけつぶっておけばいいかと思って目を閉じて目を開けたら、もうサヨさんの家だった。

トラブルいんトラブル

その9 トラブルいんトラブル

「ごくろつさま、篤君。今日は容子ちゃんは？」

「車の中でちよつと寝ているっす」

「昨日の今日だもんね。どうせ一睡もしていないんだろう。ちゃんと食べているのかい？」

少し躊躇った後で、本郷は首を振った。

多分、飲み物くらいしか口にしていない。

「やっぱりね。あんたまで倒れたら何にもならないだろうって言うんだけど、思いつめたら本当に何も食べられないからね、容子ちゃんは。それじゃ、少しでも寝かしておくかね」

「はい」

サヨさんはにこりと笑った。

「本当に良い子だねえ、篤君は」

「……はあ」

さすがに反応に困った本郷が固まる。

「容子ちゃんね、元々ああいうの弱いつてこともあるんだろうけど、トラウマがあるみたいなんだよねえ。前の会社で、何かあったみたいだよ。詳しくは聞いていないけどね。責任感が強いから、何でもかんでも引きつけて身動きが取れなくなるんだよね。ま、ここにいるほとんどのもんは、くたばったら寿命さ。自分が好きでここにいる者がほとんどだからね。だから、容子ちゃんも慣れていかないとねえ」

長い付き合いになるんだし。

つぶやくようにサヨさんは付け加えた。

「……」

「酷なようだけどね。あたしが願うのは、余計な誤解をしないようにってことだけだね」

「本郷！もう、起こしてって言っただじゃない」

いつの間にか和んでいるしーっ

がらりと開けたいつもの居間で、二人がお茶を前に話をしていたのを見て眉が跳ねあがる。

「容子ちゃん、お腹すいていないかい？」

「え？全然大丈夫。それより、サヨさん、東誠さんのことは」

昨日ばたばたしていて結局連絡している暇がなかったんだけれど。

「ああ、それはハヤカワ君だっけ。連絡もらったよ。また新しい子が入ったんだねえ。待機しているから、新しい事が分かったらすぐに連絡くれるって言うてくれたから、知っているよ」

面目ない。心配だったのはサヨさんも同じなのに。

「ごめんね」

「いーのよ。あんた達がいてくれて助かった。こんなおばあちゃんじゃ、付き添うのも大変だからね」

「うん・・・」

何も出来ないけれどね。傍にいても。

「サヨさん、あの・・・」

もしも、もしもあの時私が後押ししなかったら、東誠さんは家で一人で倒れていることなんてなかったかしら。

埒も無いことを・・・。

開きかけた口を一旦閉じる。

「もう行くね。今日は早めに回らないと」

あー、なんか情けない。

いつもいつも散々考えた末に出した結論と想っていたのに。私いつつも結局、後悔してばかりだな・・・。

ため息、落としそうになる。

「本郷、行くよ」

本郷を促してサヨさんと別れ、次に向かう。

お喋り元気のみよおばちゃんは、今日も健在だった。当然のごとく東誠さんの状態は把握していて、東誠さんの畑の世話を誰がするかということまで事細かに教えてくれた。

「あん人も大変だねーえ。ま、懲りないから、こうなるとは思っていたけど。大丈夫よ、容子ちゃん。憎まれっ子世にはばかるって言うでしょー。そう簡単にくたばらんわ、あの偏屈爺は」

偏屈・・・。

少しその台詞に微笑んだ。

東誠さんとも近所の上、いろいろ交流があるみたいだから余計に遠慮がないが、そのくせやっぱり心配しているのが分かる。今回もお土産にと野菜をどっさりくれた。

「食べもんにはうるさいから。病院でも苦勞しているわきつと。これ食べさせてやんな。起きたらね」

みずみずしいいちごに春キャベツ。タケノコまで取り揃っている。

これ以上の差し入れはないだろう。確かにここの野菜はスーパーで買うよりもずっとおいしいから。

その心遣いに笑顔を向ける。

「分かった。届けとく」

また容態が変わり次第連絡する旨約束して、ワゴンに乗りこもうとした手を掴まれた。みよおばちゃんが顔を寄せてきた。幾分言いくそうに、眉間にしわを寄せる。

「そうそう、容子ちゃん。こんな時に申し訳ないんだけど、前預けた佃煮なんだけどね、もう送っちゃったかいね」

「え」

「もうとつくの昔に送ってもらたよなあ？明日出発だもんなあ・・・ああ、いいんよ。気にせんといってね」

そそくさと去っていくおばちゃんの背中を見ながら、嫌な予感が脳裏をよぎった。

そういえばあの佃煮・・・汁がこぼれているからってタッパーを替えようとしてたんだっけ。それで昨日の午後に、送る予定で・・・。

車の窓から景色を眺めやりながら、徐々に血の気が引いていく。

忘れてた！！

うわーっ どうしよう。

ちらっと時計を見ると、いつもの時間よりもずっと早い。

この分なら早めに事務所に着けるから、今日宅急便で送れば何とか明日までには届くわよね。大丈夫大丈夫・・・

「本郷！今日は急いで帰ろう！」

そうやって、帰路を急かした。

「真紀さん・・・」

顔が合うなり真紀さんは首を振った。

「ダメ。まだ意識が戻らないんですって」

「そう」

ため息と共に頷いて、真紀さんを車に促す。

自分と同様、ろくに眠っていない真紀さんの顔色は青白い。無理もないと思うけれど。もしかしたら、自分の方がまだ車の中で眠れていたのかもしれない。

「崇さんと琴美さんは？」

東誠さんの息子夫婦だ。

「それが、ねえ……。ちょっとまずいことになっちゃって……」

「

大人しく真紀さんが後部座席に納まると、疲れたように天井を仰いだ。

「え？」

「大喧嘩、したの。あの二人」

「ええ？何で」

助手席に乗り込んで、思わず真紀さんを振りかえった。

だって、あの二人は評判のおしどり夫婦で、仲が良いのに。

真紀さんはエンジンの音に眉根をしかめて目を閉じた。

「ま、そもそも琴美さんと東誠さんの仲が良くなかったのよ。というか、一方的に東誠さんが嫌っていたみたいなんだけど。それでね、今回みたいなことがあったし、東誠さんが一人で大丈夫だって言っていたけれど、やっぱり同居の方が良いんじゃないかって話が出てね」

ずっと前からこうするべきだったのかもしれない。一応こつちで緊急時お世話になったけれど、やっぱり離れているからできることにも限界がある。前に倒れた時に、無理やりにも引っ張っていけばよかったと、崇さんはおのれを責めたそう。しかし、琴美さんは

それが自分を責めているように聞こえたらしい。行きたくないと東誠さんが駄々をこねたのは、そもそも琴美さんを理由にしていたから。

緊張と疲れと、多分いろいろあったんだろうけれども、若い夫婦は病院の廊下で大喧嘩をはじめ、真紀さんが何とか宥めて琴美さんをホテルに送ってきたのだ。

「全く、その後は病院に戻って崇さんの人生相談のカウンセラーよ。崇さんも優しいけど、東誠さんみたいな気骨がないからな―」

まだまだ、と首を振る。

それだけやらかされてもばてていないのはさすが真紀さん。

「ご苦労様、今日はもう休んでよ」

「言われなくてもそうする。お肌に悪いわ。あんたも休むのよ。いい？」

「うん。分かっている。もう今日は限界だもんね。何かあれば崇さんから連絡あるんでしょう？」

「それは頼んでいるから」

事務所の前まできて戸を開ける。降りてから運転席を振りかえった。

「悪いけどこのまま真紀さんを送ってくれる？その後、これで自宅まで乗って行って良いから」

「ちょっと、容子？」

「私はちょっとだけ野暮用……。早川君帰らせて、事務所閉めておくから」

気がかりそうな真紀さんと別れ、事務所に上がっていった。灯りが煌煌とついている中をのぞけば、人影が二人。

「あれ？岩ちゃん、何でいるの」

「ああ、容子」

「容子さん」

二人が振り返る。長身を折り曲げていた岩ちゃんが背を伸ばす。無精ひげの生えたいかつい顔をくしゃりと崩して照れたように笑った。

「いやまあ、真紀に頼まれてな、待機要員というか・暇があれば覗いてやってほしいっていわれていて、俺も気になったもんだから」

眉根を寄せてそんな岩ちゃんを見上げる。

「まさか徹夜で詰めていたなんて事はないわね」

「そんなことしていないさ。お前の方がひどい顔だぞ」

「みんなして酷い顔っていわないでよ……」

岩ちゃんは顔を斜め上に向けてがっはっはと笑った。

「岩村さんがいてくれたんで助かりました。こっちも」

疲れた様子も見せず、早川はさわやかに笑う。その様子に、少しほっとして肩に手を置いた。

「ご苦労様。入った早々厄介なことになってごめんね。もういいよ。今日はこれで事務所を閉めるから」

「そうっすか」

「そうだな。根を詰めすぎるのもよくないし。これで今日は終わるか。緊急の連絡は携帯に入るんだろ」

「大丈夫。私が閉めておくし」

「何だ？まだ仕事する気か？」

上着を取って戸口に向かっていた岩ちゃんが怪訝な顔で振り返った。

「なしなし！ただちよつとだけね」

笑ってごまかして、二人を追い出しておいてから早速部屋の中を捜してみる。決して片付いているともいえない事務所、それも結構広いそこを一通り探し終えるにはそれなりに時間がかかった。

ない・・・。

うそでしょう？

思わずがっくりと膝をつく。

えっと、ちゃんと考えて。あの時、確か戸口近くのデスクに置いていて。ビニール袋に入れていて。それでどうなったんだっけ。

考えるんだけど、それがなかなか頭から出てこない。

・・・疲れた。

私ってどうしてこうなんだろうなー。

頭の中がひとつの事だけでいっぱいになっちゃうの。他の事も考えないといけないのに、全然だめ。真紀さんに全部任せてしまっちゃって、岩ちゃんにもいっぱい迷惑をかけて、情けない。こんなことじゃ駄目なのに。独り立ちしないといけないのにな。

まずい。落ち込んできているわ。

とにかく、真紀さんに・・・ってもう寝ているわよね。

携帯に伸ばしかけた手を止めた。

ため息をついて立ち上がったとき、背後で扉が開いた。

「あ・・・」

びっくりして立ち上がる。

「琴美さん！」

嵐の隙間

その10 嵐の隙間

「どうぞ」

マグカップを差し出すと、琴美さんが軽く頭を下げた。肩までのふわっとした髪が軽くゆれた。

「ごめんなさい、こんな時間にお邪魔しちゃって」

「いいんです。どうしようもないこと考えていただけですから。琴美さんこそ大丈夫ですか」

向かい側に腰をおろすと、琴美さんはかすかに笑う。

「私は・・・ただ座っているだけです。多分、あなた方のほうが心配してくださっているでしょうね、お義父さんのことは」

言葉に詰まって琴美さんを見返す。

「やだな、こんな愚痴めいたこと、言いに来たんじゃないのに」

口元だけ微笑して、疲れの滲んでいる目を伏せた。

小柄でかわいらしい感じのする人だけに、じんわりとした疲労の影がやけに痛々しく見える。とつてもやさしくて、気の付く良い奥

さんだ。それなのに、東誠さんは同居を拒み、琴美さんとの仲もあまり良くない。

「今回のこと、本当にありがとうございました。もう少し遅かったら、手遅れになっていたかもしれないって先生に言われて。こちらの車で運んで下さったって聞いたので、お礼に来たんです」

「そんな。大した事できなくて」

慌てて容子は頭を下げ返す。

「ほんと。むしろ謝らないといけないくらいで。様子を見てできるだけお世話をおもっていたんですけど、それもあまりできなくてサヨさんが気が付いてくれなかったらと思うと」

琴美さんは小首をかしげた。

「契約にはそもそもそんなこと入っていないでしょう？週に何度か様子を見てくださる方がいるというだけで頼んでいた私たちにも責任がありますけど。その中で、とっさに対応していただけたんですもの。十分です。崇さんは今それを言う余裕がないみたいですけど、私はそう思っています」

琴美さんは目を伏せてため息をついた。

「お義父さんは幸せ者だと思います。年をとってから良い方々にめぐり合えたんですから。だからこそ、あそこを動こうとしなかったんだろっとなって思っんです」

「え？」

だって、東誠さんはなっからあたしたちを相手にしなかった。サヨさんのお墨付きもあって、比較的早く村の人たちに歓迎されることになった容子たちが一番手を焼いたのが東誠さんだ。とにかく頑固で我侭で、折れることを知らない村一番の頑固親父。毎週の生活必需品運搬は、村のみんなが必要だった。そう確信していたから、一人も外さないでやりたかった。それなのに、東誠さんはよそ者を拒絶する。話も聞いてくれない東誠さんに、何度通っただろう。通ううちに、意地っ張りで頑固な東誠さんを放っておけなくなった。ようやくまともに話してくれるようになった最近でも、すぐに文句が飛び出す。果たして迷惑がられているのかと思ったときもある。

「気に入っているんだなってすぐに分かりました。お義父さん、気に入らない人には一言もしゃべらないの。私に対するみたいだね」

気に入られている？あれで？

正直に顔に出たらしく、琴美さんはくすりと笑った。

「そうなんです。呆れるほど分かりやすいわ」

やさしい微笑とは裏腹に、琴美さんの気持ちが沈んでいくのが分かって、容子は少なからず慌てた。

「そんな。でも琴美さんだって、嫌われているなんて事・・・」

「仕方ないんです。あの人と結婚する時から半分覚悟していたことです。崇さん、うちの養子に来てもらっているんです。一人息子で、その一人息子を盗ったのが私ですから」

えええ？！

「感謝しています。あなた方がいなかったら、お義父さんあそこに住むのは無理ですから。持病もちなのに、病院にも行けないところなんて。だから、気にしてくださらなくてもいいです」

頭を下げて、琴美さんが立ち上がる。

「遅くに済みませんでした」

「あのっ」

扉に手をかけていた琴美さんが振り返った。

そんな時じゃない。こんなこと、していいときじゃないんだけど！

肩を落としたまだ若い、あまり年の変わらないだろう琴美さんの後姿に、思わず呼び止めていた。

「少し呑みませんか」

「え？」

琴美さんの目が見開かれる。

どこかで止める声があるんだけど、それを無視する。

だって。そんな駄目だよ！

勢いのまま口を開く。

「呑みましょう。日本酒しかないんですけど。そもそも酒盛りをやる予定だったんです。東誠さんと。それなのに、こんなタイミン
グで倒れて・・・馬鹿ですよね？」

言いながら紙コップと部屋の隅に置いてある日本酒のビンを取り出す。栓をあけて二つに注ぐ。

「仲良くないですよ」

戸惑ったような琴美さんの目を見返して、コップを差し出した。

「いっつも差し出した手を振り払われて、こんちくしょーって思
います。捻くれているわ口は悪いわ酒飲みだわ我俣・・・誰の言う
ことも聞かないから今回みたいに倒れるんですよ。だから、こっ
ちで呑んでいきましょう。うらやましがって起きて来ますから。ぶっ
きらばうな言葉で乱入してきますから」

顔が徐々に緩んできて、琴美さんは目じりをぬぐった。

「そ・・・うですね。いただきます」

つんと鼻にくる日本酒のにおい。それに構わずのどに流し込む。
密やかな、女同士の酒盛りは静かに続いた。その中で、琴美さんが
こっそりというように教えてくれた。

「多分、崇さんも知らないんですけど、私結構日本酒呑めるん
ですよ」

じゃあ、次の酒盛りの時には声をかけますねって答えた気がする。

はつと気が付くと、さんさんとお日様が昇っている中で、真紀さんが仁王立ちに立っている姿だった。

「呆れた！本当に呆れた！！」

容赦なく言いながら、真紀さんは紙コップを片付け、日本酒をしまう。

どんよりと重い頭に目の奥に鈍痛。

声だけが容赦なく脳に響いてきて、こめかみを抑える。

「もう少し声のトーンを落として」

「あんた馬鹿？！」

ええ、ええ馬鹿ですとも。反論する気力もなく目を上げると、真紀さんが見下ろしてきている。

「とつとと寝ろって言ったよね」

「聞いた」

「このどこが聞いたって顔なの？！」

ほんと手鏡を押し付けられて、そこに映った顔に分かっていたとはいえげんなりする。

昨日よりも酷い顔。目の下のくまが濃い。

「でも、寝てたでしょ」

ささやかな反論。

「ベットで寝ろって事よ！なのに、何でここで酒盛りなんてやっているのよ！！」

怒涛の洪水のようなせりふに敢え無く反論が消される。

うーっ

だから声が大きいってば・・・

「琴美さんが来たって、どーしてあんたはそうなのよ！あんた今日はもう帰って寝な。このままじゃ、倒れるよ」

ため息混じりに真紀さんがそう指示する。

「駄目、なの・・・」

それができたら苦労しない。そもそも昨日、見つけることができなかった佃煮を・・・どうにかして届けないと。今日の飛行機だし！

そうだ、こんなことしている場合じゃない。

脳がしゃっきりと起きて来た。

「容子！」

目を吊り上げる真紀さんに、間髪いれずに口を開く。

「真紀さん、佃煮。あのタッパーに入っていた佃煮知らない？」

「佃煮？うーんと・・・ああ、汁がこぼれていたやつ？」

「そう、それ！確か戸口近くにおいていたでしょ」

「えーっと、私動かしていないよ？そっか、あの日は東誠さんが倒れてばたばたしたからね。ずっといたのは早川君だから、彼に聞いたほうが早いかも。電話してみる？」

うなずくと、真紀さんは早速携帯に電話している。

すぐに早川君は電話口に出てきたらしい。しばらく話していたが、真紀さんは首を振った。

「そういうの見ていないって。動かしてもいないって」

「そうか」

落胆のため息と同時に肩を落とす。

馬鹿だ私。どうしてちゃんと考えられなかったんだろう。これは仕事なのに。

ぎゅっと目を閉じる。

大切なことなのに。みよおばあちゃんがせつかく作った佃煮だったのに。

どうして私ってこうどうしようもない失敗ばかりするんだろう。

顔が凍りつく。

「それ、どうかしたの？しょうがないから謝ってもう一度作り直してもらえば？」

「駄目なの。どうしても今日中に何とかしないと。何とかして見つけないと駄目なの！」

「見つけるって・・・今日中って・・・容子？何よそれは」

泣きそうになりながらも真紀さんに説明すると、真紀さんはため息をついた。

「なるほどね。でも仕方がないじゃない。理由を説明して、謝ったらいいでしょう。みよおばあちゃんなら、分かってくれるよ」

そうだよ。分かっているよ。みよおばあちゃんは分かってくれる。事情もわかっているし、孫みたいに思ってくれていて可愛がってくれているから許してくれる。でもそれじゃ駄目なんだもの。ここでおばあちゃんのやさしさに甘えていちゃ駄目なんだもの。何より、私が運びたいのはそんなじゃないんだもの！

「真紀さ・・・」

オルゴールのようなメロディーが鳴った。真紀さんの携帯の着信

音だ。

「はい、ああ早川君？うん・・・ああ、そっか。そういえば来る予定だったわね、ゴミ収集車。うん、うん。わざわざありがとう」

ゴミ収集車？！

電話を切って真紀さんが眉根を寄せる。

「こりゃ、タイミング悪かったわね。確か、ゴミ収集がくるんだって戸口に置いていたでしょう。んで、あの佃煮も確かゴミ袋に入っていたのよね。一番可能性が高いわ」

「ごみと間違われて持っていかれた・・・ってこと？！

「どこ行くの、容子」

「どこって」

駆け出した足を止めて真紀さんを振り返る。

「もう無駄だって。何日か前の話でしょう？ごみ捨て場だよ！見つけたとしてもそれをどうするのよ。持っていけるわけないですよ」

ぐっと言葉に詰まってこぶしを握る。

「容子、今回のミスだったんだから、謝ることしかできないでしょ。あんた今は普通の精神状態じゃないんだから、早く帰って寝なさい。冗談じゃなく倒れるわよ」

「でも！」

反論できない。真紀さんの言うことはいちいちもつともで、確かにもうどうしようもなくて。せつかく一生懸命作った佃煮をゴミにしちゃって。

謝るしかない。どうしようもないって、分かっているけど。

「容子！ちよつと容子！？」

扉を開けて階段を駆け下りた。

嵐の隙間（後書き）

・・・中々恋愛にならなくてすみません・・・

宝はきつとゴミの中

その11 宝はきつとゴミの中

馬鹿馬鹿！私の馬鹿！

ぐつぐつ頭が煮えたぎって沸騰している。理屈じゃなく体が動いている。えらそうなことを言っておいて、結局自分がこの始末？これでのこのご謝りにいくしかないってことにだけは。それだけにはしたくない。

わんわんと沸騰してあふれたものが、他に形をとられないまま涙になって流れていく。それをぬぐって唇をかねで、ワゴン車に乗り込むとエンジンをかけた。

「あんの馬鹿！！」

ワゴンが走り去ったあとを見送って、真紀が悪態をつく。

「また感情だけで後先考えずに突っ走ってーっ」

行く所くらいは想像つくが、その場所だって知っているとは思えない。

ただでさえ寝ていなくて感情的になっている。無理やり連れ戻すのは無理だ。本当に厄介なんだから。

タウンページをめくり、電話番号を確かめて携帯電話に入れる。

もう少し頭を使いなさいというのに。

応答があつて、真紀はにこりと打って変わった笑みを浮かべた。

「もしもし？わたくし内倉真紀と申しますが、局長様いらっしゃいますでしょうか」

「えっと確かこの道沿いに・・・」

焼却場があつたはずだ。高い煙突の。

目を凝らしているところに、真紀さんから携帯に電話が入った。

「はい？」

「馬鹿ね！今どこにいるの？」

「今焼却場に・・・」

「近いほうじゃないと思うわ。あれは月2回頼んでいる臨時的なものだと思うから。山手の高速道路が建ちかけているところあるでしょう。あっちの方だって。すぐに焼却しないみたいだからもしかし

たらあるかもね。言っておくけど、タイムリミットは午後二時よ。夜の便でしょ。それまでにいったん戻ってきた。バイク便でも間に合わないからね」

「真紀さん・・・ありがとう」

なんだか胸がいつぱいになってそれだけいうと、

「礼は早いでしょ。これで見つかったらいいけど。それじゃーね」

「うん」

方向転換して、教えてもらったほうに進む。

でもやっぱり、甘くなかったんだよね。

たどり着いた収集所のおじさんは、そんなもの知らないの一点張り。おまけに、ゴミの埋め立て場は立ち入り禁止区域に入るから絶対に出入り禁止。こういう種類のゴミの収集車が来ているのかどうかすら教えてくれない。

「大体、別の所に行っている可能性もあるでしょう。うちだけじゃないんだし」

「分かっています！でも、友人がこっちだって調べてくれたので、確実なことなんです」

「ふうん？誰に聞いたって？ここで詰めているのは俺のほかにも

もう一人要るけど、別に電話でそんなことをもらしたりしていないよ。手の込んだ悪戯だがね、さ、もう十分だろう。帰った帰った」

犬でも追い払うように手を振られる。

「ちよつと待って！」

閉められそうになった窓口の窓に手をはさむ。

「悪戯じゃないんです。どうしても必要なものなんです！お邪魔はしませんから、探すだけさせてください」

窓口の親父は嫌そうな顔で容子を睨んだ。

「あんたね、だから言っているでしょうが。ここは部外者立ち入り禁止なんだって。だからなんと言われようと・・・」

言葉をさえぎるように白髪のおじいさんが後ろからその親父の肩をたたいて電話をさす。

親父は眉をひそめて、

「ほら、こっちは忙しいんだから帰った帰った」

ぴしゃりと今度こそ閉められて、容子はため息をつく。

無理か・・・

もう本当に何にもできることないのかな。

きびすを返して帰りかけた時。

「ちよつとあんた！本当に、自分で勝手に探すだけだな？」

再び窓が開いた。

それに、容子は勢い込んで頷く。

「その戸をまわって奥。金網の向こうだ。好きにしろ」

「ありがとう！」

気が変わらないうちに容子は扉から入って金網を押し開ける。

むつと何ともいえないにおいが鼻を突いた。

広大な広大な野原。そこが、ゴミで覆われているだけでここまで酷いありさまになるのだということに、足を止める。おいと熱気とハエが飛び交い、カラスが何かを啄んでいる。ゴミの只中に放り出されて、しばらく容子は途方にくれた。

夕方、胡散臭げに見えているだけだった親父がやってきて、もう暗くて見えないだろうと外に引つ張っていった。シャワーを借りて洗い流し、上だけでも着替えると大分すっきりとした。

「もう諦めな」

そういつてくれた言葉が、打って変わって優しく響いた。

分かっていたよ、そんなこと。多分見つからないとも思っていた

し、見つかったとしてももうそれじゃ、どうしようもないんだって事。

分かっていたけど。

「お邪魔しました。ありがとうございました」

頭を下げる。

言われたとおりに事務所に帰ると真紀さんが待っていた。

「はい着替え。シャワー借りられたんだ。ラッキーだったね」

何にも問わずに服を差し出し、有無を言わずに着替えさせられる。着替えて事務所に入ると、ホットコーヒーが入っていた。

ふわりと湯気のたったコーヒー。

分かっているの。変なんだよ今。だから、こんな些細なことで何だかすごく泣きたくなってくるし。

「部活終わったら、早川君たちもこっち寄るって」

「何で？そんな必要ないのに」

「あんだね、それだけ心配されているんだから。自覚しなよ」

たしなめるような口調が、すごく癪に障った。今むき出しの神経に触れたみたいにかつとなる。

「必要ないよ！何で？彼らはバイト生だよ？私のミスだもの。それをあの子達に言っただ真紀さん」

口にすると、それは途方もない裏切り行為のように思えた。自分のミスを、自分たちが雇っているバイト生にはらす？

信じられない！

「容子、そんなの分かるでしょ。電話して聞いたこともあるし」

ちよつと困った目で真紀さんが見返してくる。

でも止まらない。熱に浮かされたみたい。

「だからって。また真紀さん、彼らを巻き込まないでよ。私が何とかするもの。できるし。すぐにいろんな人から手を借りようとするから、駄目なんでしょう！それをしないために独立したんでしょう！今のまんまじゃ何にもできないお嬢様ってのと全然変わっていないじゃない！！」

言い過ぎた。

口を閉じてすぐ、顔から血の気が引く。

慌てて顔を上げると、真紀さんのこわばった顔が飛び込んできた。

「真紀さ・・・」

立ち上がると、真紀さんはきびすを返した。戸口で足を止めて振

り返る。

「そうよね。確かにまだまだ頼りつきりよね。でも、あんたは一人で何もかも解決できていたわけ？一人で抱え込むだけ抱えてうんうんうなっているだけじゃない。一人で抱え込まれて動けないくせに、周りに助けてもらう度量もない奴なんてこっちも願ひ下げだわ！」

すぱんって音、立てて心臓のど真ん中に突き立ったような気がした。鋭いナイフの刃だけが切り裂いて、突き抜ける。

追わないとって思うんだけど、さらさらと指から砂みたいに逃げていく。その力が逃げていく。パタパタとかけていく音を耳で聞きながら、結局できたのはその場の床に崩れ落ちることだけ。

鏡みたいに、真紀さんに投げた言葉のナイフが返ってきて自分に刺さる。

違うよ。私なんて・・・いつも真紀さんに頼ってばかりだよ。分かっているし、知っているよ。

それなのに、人には頼っていないって言い張っている大馬鹿者だよ。

「つ・・・」

何だか痛いと思ってじっと床を見ると、床についた指にコーヒーが滴っていた。ホットコーヒーがこぼれてかかっているのに気が付かなかった。淹れ立てだったんだろう。すごく熱いから。熱いって感じるのが、ずいぶん鈍っている感じがする。水の中にいるみたい、じわじわと来る。痛みも。

「容子ちゃん?！」

宝はきつとゴミの中（後書き）

ゴミ収集については良く知りますので完全フィクションと言つこ
とで・・・突っ込みなしでお願いしますゝ（^^）／

お日様お届け屋さん

その12 お日様お届け屋さん

そうか、このタイミングで来るか。

駄目押し、に。

もう少し立ち直ってから来てほしかったのに。そもそも、ここから出ちゃえばよかったんだ。真紀さんみたいに。

靴音、結構響くな。

視界に良く使い込んだごつい運動靴が入る。

すぐ傍までやってきて、片膝つく。大きな靴だ。さすが長身なだけある。

大丈夫、私は冷静・・・冷静だとも。

「大丈夫っすか？」

平気って言おうとするんだけど、それさえ億劫。大丈夫だってうなずく。

「コーヒーっ」

驚いた声がして、腕をつかまれた。

そのままぐって引き上げられる。

「立てますか？」

おお、すごい力。

そのまま引つ張っていかれて、部屋の隅にある小さい洗面台。そこで、蛇口をひねって水を出して指を流れに入れて冷やす。

そっか、やけど・・・。

冷水につけてって。ずいぶん手際がいい。

もう大丈夫だから。

口数が少ない本郷は、黙って付き添って立っていてくれているんだけど、そこまでする必要ないし。後はできるから大丈夫。

そう言おうと思って顔を上げた。その先に鏡があって、自分の顔を見る。

え？

何なのよ。何その顔。私・・・なんで泣いているの？

ちょっと待ってよ。

そう思うのに、止まらない。自覚した途端、涙の勢いが増した。鏡の向こうの自分さえ見えなくなつて、肩が震えてくる。声を必死に殺すけれども、掴まれている腕から絶対に振動伝わっている。

「真紀さんなら大丈夫です。早川が送っていききましたから」

どうしてこのタイミングでそういうことを言っかなっ

こらえられない。

堰を切ったように涙があふれる。

洗面台の枠に手をかけて、水音にまぎれるように願いながら泣いた。多分、全部分かつているんだけれども本郷は何も言わないまま、ただ腕を支えてやけどの指を水につけるのをじっと見ていた。容子が泣き止むまで、彼が顔を上げることはなかった。

泣くだけ泣いたらその水分の分軽くなったのか、さっきの気分よりはましになった。気休めに顔を洗っても、目は充血しているし鼻は真っ赤になっているけれど。でも、亡霊のような顔よりはまし。

「容子さん、何か探しものがあつたんですか」

冷たい缶ジュース、差し出されて受け取る。ちょっと表情に困るけれど、今だけは彼の好意に甘えることにした。多分、本郷ならこっちから言わない限り触れないでいてくれる。

プルトップを空けて、一気に半分くらいのどに流し込んで、どれくらい自分がのどが渴いているか分かった。

「ありがとう。もういいの。探し物はね・・・」

目を伏せる。

どういえばいいのか、みよおばあちゃんにどう謝ればいいのか、
分からないだけで。

別に他意はなかった。話しながら、自分に整理をつけようとして、
事のあらましを本郷に言った。すると、彼は腕時計を見た。

「出発時間は？」

「夜の１０時半だけど？」

「行きましょう」

そう言って立ち上がる。

「ちょ・・・ちょっと本郷？行くてどこに」

「今からならぎりぎり間に合う」

さっさと歩き出した本郷に後ろから追いかける。

「ちょっと、話聞いていたの？だから、私は結局見つけれなく
て」

階下に降りると、おんぼろワゴンの隣に黒いスカイラインが停め
てあった。それにさっさと乗り込む。

「乗ってください」

迫力に押されて乗り込んだものの、エンジンをかけてスタートした車のシートの上で居心地悪く身じろぎをした。

「どこ、行くつもりなの？」

本郷の目はまっすぐ前に向けられていて、その横顔をじつと見る。横顔なら怖くない。

「その夫婦の出発する空港に」

「無理よ。行っても無駄よ。だって見つけれなかったんだから」

それでも本郷は車を走らせる。

本郷は本気だ。どうしよう。まだ私の不用意な言葉で。

「無駄なことにお金を使わないの。明日も授業あるでしょ。こんな時間だし、帰ったほうがいいよ。これは私のミスだし……本郷ってばっ」

それでも本郷は引き返そうとしない。

唇をかねで相手を睨む。

「降りるわ。私、ここから帰るから。おろして」

ちらつと本郷がようやくこちらに視線を走らせて車を歩道がわに寄せた。

ほっとして、扉を開こうとする。

右側の腕を掴まれて反射的に振り払おうとするけれども、ぴくりとも動かない。本郷を振り返った。

「本郷・・・」

睨むようにして振り返ったのに、目が合った瞬間言葉が掻き消える。強い目。太く根を張るまっすぐに強い視線。初めて真正面から目を見合ったような気がした。絶対にこの目は逸れたりしない。どこまで逃れようとしたって引き戻される、強い強い視線。その視線に貫かれる。

「運ぶものは、物だけじゃないって、そう言ったんじゃないっすか？」

どこにも避けようがない声。

胸の真中に、直球の・・・いつでも直球のせりふ。

それを大まじめに真剣に言うから・・・。

心を振るわせる。

私が運びたいのは物だけじゃない。そう言ったけれど。この屋号の意味、言ったけれど。

心の奥を覗き込んだように、どうしてそんなに覚えているの。

ごまかせないくらい、まっすぐに、そんな台詞を投げるの。

ドアに手をかけたまま、それ以上動く事が出来なかった。

車は夜のライトの群れの中を飛ぶようにして走った。

何かに祈るような気持ちで、じっと町の明かりを見ていた。

人って一生のうちに何回祈るんだろう。

何に祈るんだろう。

いつつも神様なんて、頭の隅にもなくせに。こんな時だけ。でも必死で、祈らずにはおれない。

何に？何を？肝心なそれらが分からないまま。

車は昼間のように明るいライトに照らされた空港に飛び込んだ。しり込みしていたのが嘘のように、止まるや否や車から飛び出す。

確か、ニューヨーク行き。

ゲートをくぐるのが1時間前。今ならまだロビーにいるかもしれない。早く中に入ってしまったているかもしれない。

広い広い空港をひた走る。空港の中は旅支度した小綺麗な格好の人たちが、その勢いに驚いたように道を空けてくれる。まぶしい白い廊下。ライトが隈なく隅々を照らし出し、ぴかぴかの空港。どんな気持ちができるんだろう。

ここから旅立つこと。しばらく帰れない。佃煮が好きで、今まで英語なんて話せない主婦が、右も左も分からない国に行く。期待もあるけれど、不安も大きい。

国際線の出発ゲートが奥に見えた。

走り通しでお腹が刺されるように痛い。息が切れて喉が焼ける。何とか出発ゲートの前で見つけないと。

「藤崎さん!!」

数度しか見ていない顔。それも、写真でしか見たことのなかった家族。それが一目で分かるわけないけれど。それが分かったところが奇跡。

特徴のある笑い方。仰向いて楽しそうに笑う、みよおばあちゃんにそっくり。

急に名前を呼ばれて驚いたように彼らは振り返った。

出発ゲートをくぐる手前。

いぶかしげな顔になる彼らに、急いで近づく。

容子は思わず笑った。

凄い。本当に、会えた。凄い確率で。

必死で呼吸を整える。

「あの・・・藤崎さんですね。私・・・みよさんにお世話になっています・・・お日様お届け屋の牧野容子といいます」

劇的な変化だった。

いぶかしげな顔から一転、ぱっと娘さんの顔が輝いた。

「ええ、ええ。よく聞いています。母がすっかりお世話になっているそうです。ありがとうございます」

「今日・・ニューヨークに発たれると聞いて、みよさんからの伝言、伝えにきました」

大きく息を吐いて、何とか呼吸を整える。

怪訝な顔の娘さんに。

笑顔、で。

「行っっていらっしやい。元気で頑張っって」

直接会っって言いたかったこと。

今後の不安や、期待や、もろもろの感情に対して、親が一番娘に對して言いたいこと。

簡単なこと、だ。考えてみれば。

みよおばあちゃんは、これを伝えたかったんだわ。

びつくりした顔をした娘さんが、不意にくしゃくしゃと顔をゆがめ、そして思いとどまったようにしばらくして笑顔を返した。最高の笑顔を。

「ありがとうございます」

無事に旅立つのを見送って、容子はほっと肩を落とした。

さて、引き返そうと思ってふと思い出す。

そ、そうだ本郷！

慌てて車を止めていたさっきの場所に戻る。

そこで本郷は待っていた。

じっと見られると威圧感がある目。

それに、思わずひるむ。

怒っているかな。こんなところまで来てもらって、それに時間外で。多分これ自分の車だろうし。それなのに引っ張ってきてくれて。

神妙に乗り込んだら、本郷が何も言わずに車をスタートさせる。

でも、多分喜んでくれた。藤崎さん夫婦は。だから、きっちりとお礼、言わなくちゃ。

「あの」「

期せずして声がだぶる。

びっくりして目を合わせる。

「前！」

思わず前を指差して、本郷も慌てて前を向く。

「この先、港だ。ちょっと止めていこう」

空港のすぐ出た先が、港と高速道路と一般道に車線が分かれていて、指を指す。それに、本郷も逆らわず港に車を向ける。

真つ暗な海は闇に沈んでしまっていた。波の音と潮風が海だと知らせる唯一のもので。テトラポットの山の向こう。真つ黒な闇の向こうに、ショーケースの中の宝石のように輝く飛行場が見える。そこから飛び立っていく飛行機の様子が良く分かった。

港は、コンクリートの波止場沿いに街灯がぼつぼつと立っていて、ずっと先まで続いている。

一気に言ってしまったみたい。怒っていてもどうしても。

面と向かうとなかなか言い出せなくなる。

思い切って容子は口を開いた。

ぼうつとした灯りが差し込む。その灯りを見ながら。

「ありがとう、本郷。無事、会うことが出来た。何とか、ちゃんと伝えられたと思う。みよおばあちゃんが言いたかったこと。私、

もしここに来なかったら、きっと後悔してると思う。だから」

と覚悟を決めて顔を上げる。

ありがとう。

言いかけた言葉が引っ込んだ。

ずずずと本郷がハンドルに覆い被さるように突っ伏してしま
って、びっくりしたから。

ええ？

「・・・良かった」

大きく息をついて、本郷が呟いた。

「会えたんだ。やけに暗いから会えなかったのかと」

「いや、暗くはなかったの。ほっとした反動。あんたの方が思い
つめた顔するから言い出せなくて」

「何っすかそれ」

髪を掻き揚げて、本郷がハンドルになついたまま笑う。

う・・・わ・・・

ぎゅるっと全身の血が一気に体内を駆け巡った。頭の中が、真っ
白になる。規則正しい拍動だけが、やけにうるさく響いた。

初めて見た。笑顔。

当初の顔からは想像も出来ないような、人懐っこい笑み。鋭い視線も和らぐと、好青年で通りそうなくらいだ。さぞかし女の子にもてるだろう。

「容子さん？」

「・・・え？」

「ぼんやりしてどうかしたんですか？」

いや、その・・・。

うろたえて容子は思わず口元を抑えた。

「顔、赤いですよ？ひよつとして熱でも出ました？」

身を乗り出す本郷に、思わず身を引く。

「違うの。大丈夫。熱なんて出ていないから」

手を前に、顔を隠すようにしたのがそもその間違いだった。隠すから人は余計に見たくなるもので。

「そんなことを言って。ろくに寝ていないでしょう。真紀さんが言っていました」

真紀さんめ！どうしてそういう余計なことを言うかな？

「平気、熱じゃないったら」

「確かめるだけですから手をどけて下さい」

うーっ

ダメっ 余計に顔が赤くなるじゃないのっ

「容子さん」

手首に手がかかった。

絶対に見せるものと力を込めたのに、その手が外れる。

気が付かなかった。大きな手だ。手首なんて簡単に一周してしま
うくらいの、大きな手。振りほどけない強い力。

ものすごい早く鼓動を始めた心臓の音の横で、年下の男の子、じ
やないって急にはつきり自覚する。

うわ・・・てんで敵わないんだ。

その事実には、背筋がぞくつとする。

もう片方の手が額に触れて離れた。

「やっぱり、少し熱い気がする。戻りましょうか」

「う・・・うん」

離れた手にほっとして、容子は頷いた。なんか心臓に悪い、と思
いながら。

宣戦布告

その13 宣戦布告

「ああ、容子ちゃん！ありがとう。わざわざ空港まで見送りに行ってくれたんだって？娘がえらく感激していてね」

次の日の定期配達日に、みよおばあちゃんは満面の笑みで寄ってきた。

「あ、みよさん、あの・・・」

言いかけた先を言わずに、みよおばあちゃんは容子の手を握る。

「佃煮ね、あれ渡さないでくれたんでしょ。ありがとうね」

「は？」

首をかしげた容子に、みよおばあちゃんが可愛らしく首をすくめた。

「おじいさんに怒られちゃってね。わざわざ出発前にあんな高張って重いものって。あとから送れば済むことなのについていわれてそうだって思ってたね。結局、体につけてがんばるなさいって、それだけ言えれば良かったのよね。だから、見送りに行ってもらえて本当に感謝。ありがとう。これ以上の贈り物はなかったって向こう

からの電話口で泣いていたのよ」

うわぁ・・・

目じりを赤くしたみよおばあちゃんに、思わずつられて目が潤んでくる。

考えて考えた末に出発する夫婦に送った言葉。

ごめんなさい、じゃなくって、体に気をつけて頑張ってって送り出した。空港で夫婦を見つけたときの、彼らの顔を忘れられない。あんなにうれしそうな顔をしてくれるとは思ってもいなくって。

「ありがとね。嫌だねー年をとると涙もろくなつて」

みよおばあちゃんがエプロンの端で涙を抑えながらこのときばかりはそそくさと奥に走っていく。

私、何かを届けられたのかな。

荷物を運ぶんじゃないくて、お日様を。

「容子さん！携帯が鳴っている」

駆けて来た本郷から携帯を受け取って出る。

「東誠さん、目を開けたって！！」

開口一番、真紀さんの潤んだ声。

「やったあっ!!」

思わず飛びあがる。

やった! やった! 良かったよー本当に。

「よ・・容子さん」

あれ?

「容子!とにかく早く戻っておいで! 東誠さん、酒盛りがしたいって駄々こねているみたいだから」

「了解!」

電話を切って、我に返る。

「ごめん、真紀さんというような気になっていたから」

腕に飛びついていました。思わず。こんな朗報は、抱き合って喜ぶものでしょ。普通そうでしょ?

それなのに、本郷はそのままずると力が抜けたように座り込んでしまう。額を抑えているんだけど、確認するまでもなく耳まで真っ赤で。だからきつと顔も真っ赤だろう。

本当に可愛い奴だなあ。

早川君が言っていたことが、分かりだしてきた。

本当、目つきはあんなに怖いのにね。実はものすごく照れ屋なただの好青年？対比が激しくて笑えるけど。

「もしもし？本郷？悪かったってば。もう飛びつかないから」

腰抜かされるのはどうかとも思うけど。

頬をつつきながら言うと、本郷は前髪の間から片目を覗かせた。でも、熟れたような顔のせいか、まったく怖くない。

それが少しうれしい。

「今度の件は、かなり助けられたね。本郷に。感謝している」

ありがと、そう言いながら顔を上げる。

真っ赤な顔のまま、本郷は目線を外す。

その顔が本当に際限なく赤くて面白い。

でもそうやって油断していると、心臓をさらっていかれるのをすっかり忘れていた。

「役に立ちましたか？」

横を向いて、すねているような顔が可愛くてくすくす笑いながら頷く。

「立ったわよー」

「それじゃ、ご褒美要求していいですか」

「私で出来ることなら何でも」

何だろう。

でも結構何でもやってあげようと思った。給料上げろというならその要求も飲んでいいかなって。でも本郷なら何を望むんだろう。

何となくバイト代じゃないのかも、と思いかけたところで本郷が真っ赤な顔を上げる。

髪を掻き揚げたから、目が良く見えて。知らなかった。すごく黒目が大きくて、潤んでいるように見える。きれいな目。びっくりする。

もったいない。髪で隠しちゃうなんて。

でもその言葉は、口元で消える。

霧散する。

逸らすことの出来ない目。

心臓の音がやけに大きい。

吸い込まれるって思った。

光をはじく、黒目勝ちの眼差しに。

「容子ちゃん！まだいるかい？！」

「は・・・はいっ」

飛び上がるように、慌てて立ち上がった。

外の音が急速に戻ってくる。

玄関先からみよおばあちゃんが満面の笑みで駆けて来る。

「東誠さんが・・・東誠さんがね！」

涙ながらに報告するみよおばあちゃんと喜びを分かち合いながら、ものすごい勢いで心臓が鳴っているのが分かった。

な・・・にやってんだろ・・・え？あれ？あれ???

うわーっ もう何かすごい。

ぶんぶんと手を振り回す。

喜び合って笑顔で分かれていつもどおりに窓から手を振ってさよならできたと思う。

びっくりした。何故だかびっくりして。落ち着かない。

「あのさ、ご褒美、飲みよのきの送迎ってのはどう？それとも、別の機会の飲みにする？それとも」

「容子さん」

びくって肩が震えた。

うわ、なんて情けない反応。

だからこそ、無様にならないように腹をくくる。

「何？」

山道の途中で車を止めて、本郷が振り返る。

分かっていても、その目に気圧される。闇に沈んだ中でも、鋭い目つきじゃないことだけは分かった。

見返すしか出来ない中で、でもしっかりと相手の眼差しだけはわかっていて自分がいて。なんか自分の感覚とか、おかしいと思っていたときに、頭の後ろを同じように引き寄せられる。

ごく自然なことのように唇が触れる。柔らかな感触が唇、に。

首筋にかかる大きな手。肩にいつの間にか回った手に、力がこもる。それが、唐突に外れた。

「俺は本気ですから」

どうしてこいつの言っていることって、いちいち心臓に来るんだ

ろっ。

うるさい心臓の音の中で、本郷の言葉が脳裏を回った。

本気？

凄く遠くでその台詞が回っている。

だからちつともそれを捕まえられなくて。

それなのに、爆発しそうなくらい、心臓が踊る。

え・・・え？

私・・・

今更、唇に指で触れる。

一瞬とはいえないくらい長く。ついさっき。

ええ？え・・・えええええ？！

キス！！

自覚して、頬がかつと燃えた。

「ご馳走様」

赤面症の癖に。年下の癖にーっ。こんな時だけ何故余裕たっぷりなわけ？！

さりとて、何事もなかったかのようになを向いて運転を再開する本郷を睨みつける。

春はこれから本番。

窓から見た夕日は暖かくやさしく空を包んでいた。

e n d

宣戦布告（後書き）

つたない文章をお付き合いいただいてありがとうございました（^^
色々設定は考えてあるんですけど、伏線を敷いたまま・・・で申し
訳ありません

容子が会社を辞めた理由とか、真紀さん何者とか、岩ちゃんのお様
とか。

とにかく、このお話を色々なことに頑張っている方々に読んでいた
だけたら、これ以上嬉しいことはありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3055k/>

お日様お届け屋さん

2010年10月11日05時26分発行